

# 改革の道を模索するロシアの技術教育

—1992年春のハバロフスクの学校視察印象記—

佐々木 享

- 1 いまなぜロシアの教育か—視察団の成立 (100)
- 2 ハバロフスク市の概要 (101)
- 3 ハバロフスクの教育施設の概要 (102)
- 4 幼稚園 (107)
- 5 日本語教育を導入した第3番中学校 (108)
- 6 労働教授は学校と教育—生産コンビナートで (112)
- 7 設備更新のおくれる中等職業技術学校—第30番ペーテウー (113)
- 8 建物を日本人が建てた第7番中等職業技術学校 (117)
- 9 リツェイ—新しいタイプの学校 (118)
- 10 苦悩する鉄道テクニクム (120)
- 11 カレッジ化の動き—電気通信テクニクム (121)
- 12 ハバロフスク工業テクニクムの専攻は建設材料工学 (122)
- 13 ユニバーシティの性格をもつハバロフスク教育大学 (125)
- 14 ハバロフスク鉄道大学 (128)
- 15 細分化された専門、資格、就職 (130)
- 16 きれいな調度品、ゆきとどいた展示、コンピュータ (132)
- 17 財政難と教育事情の悪化、生徒の実習の賃金 (133)
- 18 自由化の波、グラスノスチ (134)
- 19 レーニン像健在—街の表情 (135)
- 20 賃金、インフレ、失業 (138)
- 21 ホテルの食料事情など (140)
- 22 暖かい歓迎 (140)
- 23 ロシア人の親切—個人的な体験から (141)
- 24 印刷インクがない? (142)
- 25 現代ロシアの教育をどうみるか (143)

## 1 いまなぜロシアの教育か——視察団の成立

去る92年3月27日(金)から4月3日(金)まで10数名の友人とともにハバロフスクに滞在し、幼稚園から大学にいたるいくつかの教育施設を視察してきた。この視察は、わが国に紹介される機会の少ないロシアの技術教育を中心としているだけでなく、ソ連邦解体直後という特異な時期に行われた意味もあるので、若干の見聞と印象をややくわしくのべ、視察後の調査で判明した若干の事項をくわえて記しておく。なお私はこの視察団の責任者ではあったけれども、ここに記すものは個人の責任でまとめるものである。

いま何故ロシアの教育かという趣旨をまずのべる。私の属する技術教育研究会は、外国の技術教育、職業教育の事情を調査・研究することをその活動目標の一つに掲げてきた。なかでも、社会主義国ソ連が国の施策として重視してきた技術・職業教育への関心は、比較的高く、すでに1980年と1982年の2度にわたり視察団を派遣したことがあった。最近では、1986年に始まったペレストロイカ政策下のソ連の教育の実情を知りたいとおもったけれども、文献資料に頼るだけでは限界があるようにおもわれた。

じつをいえば、視察旅行を思いついたのは政変前の昨年6月頃だった。ところが昨年8月の政変と覇権主義的なソ連共産党の崩壊、ソ連邦の解体と独立国家共同体への移行、物質の供給不足のなかで始められた価格の自由化にともなう物価の上昇等の経済事情の悪化等事態が急速に変化した。このため、上述した一般的事情にくわえて、ロシア連邦の学校教育とくに技術教育や職業教育における変化あるいは改革の方向を、ソ連邦解体直後という1992年春の段階で見定めておきたいという要求は切実なものとなった。他方、マスコミ等を通じて入る情報を総合してみると、教育事情を視察したいという企画は、実現し得るかどうかが危惧され、費用をかけるだけの意味があるのか、旅行団が成立するのかなどの懸念もあった。収穫があるかどうかという点での見通しがじゅうぶんにあったわけではないけれども、困難といわれるいまだからこそ行ってみたいという気持ちが、今回の企画の原動力になったといえる。

案ずるより生むはやすしで、教育施設視察の企画は、相談にのっていただいた田中かな子氏の示唆を得て、日ソ協会本部を通してロシア対外文化協会ハバロフスク支部副会長のフトールシン氏に連絡したところ、受け入れ可能だから希望を出して欲しいといわれ、実現の見通しがついた。出発前には、ロシア対文協はソ連邦解体以後機能を喪失したなどという情報も耳にしていたから、少なくともハバロフスク支部は昨年10月に露日協会ハバロフスク支部として再編され、きちんと活動していることを知ったのも、今回の旅行の収穫のひとつだった。

技術教育研究会の会員の希望者(工業高校の教師3、高専の教師1、大学の教師7、計11名)だけでは予定した定員に及ばず、一つのツアーとしての視察団が成立するかどうかは実現が危ぶまれた。さいわい、日ソ協会の機関紙『日本とソビエト』に紹介された私たちの企画を見た藤下悌彦氏

と村田豊美氏が参加下さり、13名+添乗員1名（田中かな子氏）の視察団が成立した。技術教育、職業教育の施設に焦点を合わせた視察団としての団体行動に、満たされぬ思いがあったに違いないのに、黙々と参加して下さったお二人に私たちは感謝しなくてはならない。

3月末～4月初旬という時期を選んだのは、この時期がわが国では学年末休みであると同時に、9月1日学年始期制をとるロシアでは学期途中であり、授業を参観することができると考えたからである。実際私たちは、多くの授業を参観することができた。

なお、ロシアの教育事情を視察するための対象としてハバロフスクを選んだ理由は単純で、地方都市とはいえ人口60余万を擁するこの市には幼稚園から大学までの教育施設が揃っているであろうから、わざわざ高い費用を出してモスクワやサンクト・ペテルブルグ（旧レニングラード）まで行かなくてもよいだろうということだった。これは10年前に同様の視察旅行を企画した際の原正敏氏の発案であり、今回はそれを継承したに過ぎない。

## 2 ハバロフスク市の概要

ハバロフスク市は、ロシア連邦の極東に位置し、アムール河とウスリー河の合流点にある都市。広大なハバロフスク州の州都である。ロシア側の通訳ミーシャは、現在の人口は63万余と言っていた。ホテルの売店でもとめた『ハバロフスク——地理学的図解書』（1989）によると、ハバロフスク市の人口は80年に53万8千、85年に57万6千、89年に60万と増加した。ロシアでも都市への人口集中がすすんでいるわけである。以下の記述は、この書物を手がかりにしており、数字は89年当時のものである。

ハバロフスクは多民族都市で、90の国民や民族が住んでいる。ロシア人（89%）、ウクライナ人（5.0%）、タタール人、ユダヤ人、白ロシア人（各0.9%）、朝鮮人（0.8%）、エベーク人（旧称トゥングース人 0.5%）、のほか、多くの少数民族がいるわけである。

住民の82.5%は家族と一緒に住んでいる。家族の平均は3.2人である。子どもが少ないのだ（1986年の1万人あたり出生率は176.0であった）。

住民の男女比は極めて不均衡である。戦前の1939年には、女性100人に対して男性は110人であった。大祖国戦争（ロシア人は第2次大戦をこう呼ぶ）後の1959年には、女性100人に男性85人であった。戦禍に直接にさらされなかったハバロフスク市でさえ戦争の犠牲は大きかったのである。この不均衡の是正にはあと50年かかるだろうといわれている。

住民の学歴構成は次の通り。

高等教育修了	10.6%
高等教育中退	3.0
中等専門教育修了	13.5
中等教育修了	22.2
不完全中等教育	26.2

初等教育修了	16.3
不就学	8.2

これは、文盲の多かった帝政下のロシアが、社会主義革命後、大祖国戦争という困難な時期をばさんで、宮々として築きあげてきた到達点である。しかし、今後のロシアの教育がどうなるかは、次項以下にのべるように、私たちのかいまみだりでも、厳しいものがあるようにおもわれた。

ハバロフスク市には、全日制の普通学校（後述の普通中学校であろう）が89校あり、約7万の生徒が学んでいる。そこには、9種のスポーツを教えている16クラス、17の音楽クラス、物理と数学教育を深める6クラス、外国語教育を強化している2校などの39の特別学校がふくまれている。ロシアには以前からこのような特別教育を行なう学校のあることが知られている。私たちが参観した第3番中学校の日本語教育のクラスも、ここにいう特別学級の1つなのかも知れない。

ハバロフスク市には1987年には18の中等職業技術学校があり、そこに7千名以上が学んでいた。

また同市の中等専門学校には2万名以上の学生が学んでおり、大学には毎年1万2千名以上が入学している。

ハバロフスク市は南北に長い。西側はアムール河で隔てられ、市の主要部はこの河岸と、南北に走るシベリア鉄道間の地域に発達している。行政区（ライオン）は、北から、赤色海軍区（クラスノフロートニィをこう訳した）、キーロフ区、中央区、工業区に区画され、シベリア鉄道の東側が鉄道区となっている。

中央区が、文字通り市の中心街らしい。私たちの滞在したイントゥーリストホテルは、中央区の西端つまりアムール河の岸に面している。

私たちの参観した教育施設のうち、第7番中等職業技術学校と第30番中等職業技術学校は工業区にあり、私たちが訪問した教育-生産コンビナートは鉄道区のそれであったけれども、その他はすべて中央区にある施設であった。

ところで、第二次大戦後におよそ60万といわれる日本人がシベリアに抑留されたことは、いわゆる北方領土問題と並んで日露関係に関して日本人には忘れられない問題の一つである。その傷跡は、空港から中央区のイントゥーリストホテルに向かう途中にある日本人墓地として遺っている。ここは、抑留されて労働に従事し、この地で亡くなった日本人の墓地である。それだけでなく、今回私たちが訪問した第7番中等職業技術学校のように、その建物をこの時期に抑留された日本人が建設した学校も遺されている。

### 3 ハバロフスクの教育施設の概況

私たちは、1週間たらずで次のような計12の施設を訪問した。

幼稚園—1校=第126番幼稚園（3/31）

中学校—2校

第3番中学校（3/30）

第12番中学校 (3/28)

教育－生産コンビナート (4/2)

商業リツェイ——1校 (3/31)

中等職業技術学校——2校

第30番中等職業技術学校 (3/30)

第7番中等職業技術学校 (4/1)

テフニクム——3校

電気通信テフニクム (3/31)

鉄道テフニクム (3/31)

工業テフニクム (4/1)

大学——2校

ハバロフスク教育大学 (4/1)

ハバロフスク鉄道大学 (3/28)

このほかに博物館の見学 (4/2)、市民の家の訪問 (3/29)、教育行政当局者やロ日協会ハバロフスク支部幹部との会談も行なわれた (3/30)。はじめに、教育システムを概観しておく。

ロシアの教育施設といえば、まず保育所、幼稚園、中学校がある。

幼稚園と保育所とは、わが国の同様の施設と考えてよい。また大ていの女性が働いているロシアでは、幼稚園と保育所の機能を合わせもった保育・幼稚園がよく発達していた。これは、わが国にはないものである。

普通学校としては、まず、私たちが訪問した第3番中学校や第12番中学校のように、第1学年から第11学年まで揃っている学校がある。11学年のうち第4学年までの教育が初等教育、第5学年から上が中等教育である。中学校と呼んでいるけれども、わが国の小学校学年がふくまれていることに注意したい。

第9学年修了の段階で、①そのまま第10、11学年にすすむ者、②中等専門学校(テフニクムなど)にすすむ者、③中等職業技術学校(エス・ペーテウー)にすすむ者とに分かれる。イメージを浮かべるためにやや乱暴に日本の学校制度になぞらえると、①が普通高校、②が5年制高専、③が職業高校といえようか。イントゥーリストホテルや私たちが訪問した大部分の教育施設の所在地である中央区の中学生の進路は、①が60～70%、②と③が30～40%で、その3分の2がエス・ペーテウー、3分の1が中等専門学校の由であった。

中等職業技術学校(エス・ペーテウー)\*と中等専門学校(テフニクムなど)との違いは、私たちにはわかりにくい。前回の訪問で両者の違いを原正敏氏が尋ねたのに対し、ペーテウーは労働者になるため、職業(の技能資格)を得るための学校で、テフニクムは技術者(おそらく原語はインジェニエールではなくチェフニク)としての資格を与える学校である、と説明されていたことは参考になろう。なお従来職業技術学校(ペーテウー)は2年制で中等学校ではなかった(その

卒業者に大学入学資格が与えられなかった)。最近すなわち1984年に始まった教育改革以後は、すべて3年制(まれに4年制)の中等職業技術学校となった如くである\*。すくなくともハバロフスク市ではそうであった。なお中等職業技術学校は、正確にはエス・ペーテウーと称すべきものである。これを省略して従来通りペーテウーと呼んでいることが多い。

\*中等職業技術学校の原語は、スレドゥナヤ・プロフェッショナルノ・チェフニーチェスカヤ・ウチーリシエである。直訳すると「中等専門技術学校」となる——実際に以前はそう訳されていたことがある——けれども、そうするとテフニクムなどの総称である中等専門学校(原語はスレドゥニエ・スペツィアーリニエ・ウチーブニエ・ザベジェーニア)との区別が判然としなくなる。この区別を明確にし、日本人にわかりやすいようにするため、「中等職業技術学校」と訳すことにした。くわしい経過については、原正敏「ソビエトの技術・職業教育をみて」(『技術教育研究』第18号、1980年8月)を参照。中等職業技術学校の略称はエス・ペーテウーだけでも(エスはスレドゥナヤ=中等の頭文字)、現在はすべて中等程度になっているので、たんにペーテウーと略称しても混乱は起らない。

\*\*これは、84年に始まった教育改革の結果である。1982年に訪問した当時は、普通中学校は10年制であり、テフニクムやペーテウーにすすむのは第8学年を修了してからであった。

教育-生産コンビナート(ウーペーカー)は、ロシアに特有の教育施設である。私たちが視察した施設の看板は「学校共同教育-生産コンビナート」となっていた。前回の報告では、長谷川雅康氏もそう訳していた。社会主義ソ連は、革命後ほぼ一貫して生産労働と教育との結合を重視してきた。しかし実際問題として生徒を生産現場に引き入れることは、企業の側からみて障害が多くなるし、学校側からみても必ずしも教育的なことではないという反省がうまれたらしい。そこで、企業側が施設設備と指導者を提供して、そこに中学生を通わせてほぼ工場と同じ労働に従事させるための施設として1970年代から創設され始めたのが、教育-生産コンビナートである。今回私たちが訪問したコンビナートでは、労働教育と職業指導を目的としていると説明されていた。

ハバロフスク市のウーペーカーは、5つに分かれた行政区に1校ずつあるとのことであった。今回は、鉄道区のウーペーカーを訪問した(前回訪問したのはキーロフ区のウーペーカー)。

ロシアには、このほか日本の社会教育施設にあたるピオネール宮殿、および青年技術者ステーション\*とよばれる施設のある(あった)ことが知られている。「これらの施設は、経済事情困難で目下正常に機能していないので、残念ながらご案内できない」と露日協会のフトールシン氏は言った。このへんに、今日のロシアが直面している教育事情が端的に表われているのかも知れなかった。

\*少年たちの工作や技術関係のさまざまな自主サークルのための施設。企業あるいは労働組合が施設や指導員を提供して運営している。1980年にモスクワで訪問した施設には「青年技術者の家」(ドーム・ユーノバ・チェフニカ)という看板がかかっていた。当時私たちは青年技術者センターなどと訳していた(拙稿「子どもたちの夢を育てる青年技術者センター訪問記」『技術教育研究』第18号、1980年8月)。82年にハバロフスクで訪問した施設は「青年技術者ス

テーション」と称していた。「青年」といっても年長少年の意であり、「少年」とする方がピンとくるかも知れない。

ソ連では、この種の各種の校外教育施設が広く普及していた。1990年には、ピオネール宮殿やピオネールの家5,077、青年技術者ステーション1,817、青年自然科学者の家1,251、青年旅人の家154、夏のピオネールキャンプ81,787、などがあったとされている（『ソ連邦の国民経済・1990年版』による）。

中等教育としての普通教育と職業教育とを合わせて実施するのが中等職業技術学校（ペーテュー）であり、街で買ってもらった『ハバロフスク市の高等教育施設、テクニクム、ペーテュー』（1989年）という地図つきのリーフレットによると、ハバロフスクにある中等職業技術学校は18校であった。このうち、第41番ペーテューが昨年9月からリツェイという新しいタイプの教育施設に変わっていた。（ペーテューは番号で呼ばれているけれども、欠番が多いので41校あったわけではない。）私たちは、第7番ペーテュー（電気・通信関係の専門を教えている）と第30番ペーテュー（造船関係の専門を教えている）とを訪問した。前者は前回にも訪問した学校であった。

第7番ペーテューで教育している専門（スペツィアリノスチ）は、前述のリーフレットによると、①照明、配線および電気装備のための組立工、②電気装備の操作、工業用無線装置の組立と修理のための電気技術者、③ラジオ・テレビのサービスと修理のための電気技術者、④通信オペレータであった。また第30番ペーテューのそれは、①電気・ガス溶接工、②造船指物師、③工作機械工、④船の竣工請負、⑤旋盤工、⑥船の組立、⑦船のパイプ曲げ、であった（直訳調である）。これは、当該校の校長の説明（後述）とは少し違っている。

中等教育と専門教育を合わせて行うのが中等専門学校（テクニクムなど）である。中級の資格を持つ専門家に必要な知識、能力、習熟の総体を養成する学校、と定義される（依田有弘「テクニクムについて」『技術教育研究』第22号、1982年8月、49頁）\*。私たちは、電気通信テクニクム、鉄道テクニクム、工業テクニクム（この学校で教育している専門については後述）の3校を訪問した。前の2校は前回にも訪問した学校であり、鉄道テクニクムの校長は10年前と同じグリツォフ氏だった。ペーテューもテクニクムも、その教育課程はわが国の「学科」よりもこまかく分化しているのがふつうである。

\*ロシア語（ロシア人）には、働く人をかなり厳密なはんちゅうに区分する習慣がある。学校制度と関連させていうと次のようになる。

①中学校（だけ）あるいはペーテューを卒業した者はラボーチャーである。ふつう、労働者（あるいは労務者）と訳されている。②テクニクムを卒業した者はチェフニクとなる。英語（圏）でいうテクニシャンであり、戦前の日本語にいう技手がこれにあたり、現代の辞書も大抵「技手」としている。ほかに日本語に適切なことばや概念がないためやむを得ず「中級の技術者」ということがあるけれども、次項にのべる技術者ではないので誤解を生ずるおそれがある。③工科系大学を卒業した者はインジュニェール（技師あるいは技術者と訳される）とな

る。英語でいうエンジニアである。

なおロシア語ではホワイトカラーをラボーチー(=労働者)とはいわず、スルージャシーと呼び、職員、勤務員、事務員などと訳されている。教師もこの中にふくまれる。

ソ連では、中等専門教育は重視されてきた。90/91年度についてみると、その学校数4,556校、生徒数は409万7千名に達していた。5年制高専の比重の小さいわが国とは対照的である。技術系の学校が過半を占めるのでテクニクムに代表されることが多いけれども、他の専門を養成する学校もある。ハバロフスク地方にある中等専門学校は、生産技術系13(うちハバロフスク市5)、建設系4(3)、交通・通信系2(2)、林業・測量系3(1)、経済学系3(3)、医療技術系4(1)、教員養成系4(1)、文化・芸術系2(2)の計35(うちハバロフスク市に18)校であった(1987年現在)。

またソ連の中等専門学校では、伝統的に、夜間課程や通信教育課程を重視してきた。前掲『ハバロフスク市の高等教育施設、テクニクム、ペーテウー』によると、私たちが訪問した工業テクニクム、電気通信テクニクム、鉄道テクニクムにも、夜間課程が開設されていた。ついでにいうと、ハバロフスク市にある中等専門学校17校中で夜間課程を置いていないのは、測量テクニクム、協同組合テクニクム、芸術専門学校、教育専門学校、医療専門学校の5校のみで、このうち医療専門学校には通信教育課程が置かれている。

なお、中等専門学校は、従来は9学年修了者を受け入れて4年間教育する施設と理解されてきた。ところが最近では、11学年修了者を受け入れて2年間教育するコースが生まれている。こうなると、年齢でいえばわが国の短期大学に相当することになり、後述のようにこの課程をカレッジと呼ぶようにしようという動きがある。

ハバロフスク市にある高等教育施設は、次の13校である(1989年現在)。

- 1 医科大学
- 2 教育大学
- 3 鉄道大学
- 4 工科大学
- 5 体育大学
- 6 文化大学
- 7 経済大学
- 8 薬科大学
- 9 高級民警大学
- 10 高級軍事建設大学
- 11 全ソ連通信制法科大学の学部
- 12 通信制ソビエト商業大学の分校
- 13 ノボシビルスク電気通信大学の通信制分校



このうち9、10は特殊な目的の学校、11以下の3校は他の都市にある大学の通信制課程の分校だから、独立校としてのふつうの単科大学は8校である。換言すれば、ハバロフスクはユニヴェルシテート（英語でいうユニヴァーシティ）は存在しない（大学と単科大学の区分については後述）。8校のうち最も大きいのは、教育大学で、次が鉄道大学である。私たちはこの2単科大学を訪問した。

技術教育研究会としては、これまで1980年と1982年の2回にわたってソ連の職業技術教育施設を視察している。その概要は、『技術教育研究』第18号（1980年8月）と第22号（1982年8月）に紹介してある。とくに82年の視察はハバロフスク市内の施設だけであり、今回訪問した施設のうち、鉄道大学、電気通信テクニクム、鉄道テクニクム、第7番ペーテウーの4校は、前回にも訪問した学校である。

#### 4 幼稚園

ハバロフスク市には、幼稚園、保育所は合わせて約250あるとのことであった。技教研の視察団が幼稚園を訪問するのは初めてなので、ややくわしくのべる。

私たちの訪問した幼稚園には「第126番保育・幼稚園」（ヤースリ・サート）という看板がかかっていた。しかし実際にはすでに保育は行っていないので「幼稚園」であるとのことだった。生後3年間の有給の育児休暇制度が3年前に実現してからは、保育所（ヤースリ）やヤースリ・サートの保育機能は急減してハバロフスク市内ではほとんどなくなっており、幼稚園が主体となっているのだという。ただし、学生どうしの結婚で生まれた子どもの保育のためには、市内に「赤ちゃんの家」という保育施設ができていているという。

この幼稚園は、鉄道・橋梁・住宅等の建設をする建設企業もっている31年前に創設された施設である。この建設企業に働く技術者・労働者の住宅街（＝アパート群）のなかにあり、ここに来る子どもたちのほとんどは、この住宅の技術者・労働者の子どもである。すぐ近くに、区立の幼稚園もあるとのことだった。

現在、3歳から学校にあがる直前の7歳までの157名が在園し、園は7時から19時までやっているという。私たちが訪問した時には午前中で帰宅した子どもたちがあるといっていた。他方19時までやっているともいっていたので、日本流に言えば保育機能をもっていることになる。この辺の事情は聞きもらった。

子どもたちは年齢別に15～20人に編成され、1教室に2人の教師がつき、6時間交替で指導している。そのほかに補助者（ニャーニャ）がついている。教師のほとんどは就学前教育の資格を持つ者で、1人だけ、音楽教師の資格をもつ教師がいる。その指導の成果であろうが、授業参観修了後に見せてもらった子どもたちのダンスや歌唱はほんとうに上手だった。1人の医師と2人の看護婦がいるといっていたけれども、彼らが常勤かどうかは聞きそこねた。

教師の給与は月1,000～1,500ルーブル。もう年金生活に入ってよい年齢だけれども、子どもが好

きだからまだ働いているという女教師もいた。

幼稚園は義務制ではなく（ハバロフスク市では約80%が通園している由）、親たちは、1人につき年に11,000ルーブルを支払う。実際には月200ルーブル（母子家庭は半額）支払い、のこりは企業が負担している。親の負担は以前は月12ルーブルだったというから、最近になって急激に値上がりしているわけである。

ペレストロイカ以後の大きな変化は、従来はロシア共和国教育省の定める教育課程に大きくしぼられていたけれども、いまは地域の実情に応じて自主的に計画するようになったこと、教材教具なども自分たちが創作するようになったこと、いわば自給自足体制になったことだと副園長のワレンチナさんは言っていた。

### 5 日本語教育を導入した第3番中学校

都心部にあり、ハバロフスク市では最も古い学校の一つである第3番中学校を訪ねた。30年前までは朝鮮人のための学校であった由。学校の歴史にもハバロフスク市が辿った歴史が刻まれているわけである。現在の校舎は、2年前の大火の後に新しく建てられたものである。

この学校は第1学年から第11学年まで揃っており、生徒数は約1200名。教師は70名。北方系の少数民族のための学級が2クラス（各学年？）と、ろう児のためのクラスもある。この学校でも、労働科を中心として多くの授業を参観した。その中には、組みもの授業もあった。1年生をふくむ小さな子どもたちが文字を書くのに鉛筆ではなくボールペンを使っていたのは、意外だった。

なお、村田豊美氏によると、第3番中学校では、子どもたちは朝学校に来てから、食堂で朝食をしていたという。カーシャ（おかゆ）、パン、ジュースなどらしい。村田氏も食べたがおいしかったという。

この第3番中学校の大きな特徴の一つは、最近になって日本語教育を導入したことである。第1、2学年でやっているというから2年前から始めたのであろう。例によって教育課程表のような資料を得ることができなかったので、カリキュラムなどについては、よくわからなかった。村田氏によると、1年生の日本語は週2時間の由\*。

	1	2	3	4	5	6
月	ロシア語	数 学	体 育	読 み 方	日 本 語	
火	音 楽	ロシア語	数 学	歌 唱	読 み 方	
水	ロシア語	体 育	数 学	読 み 方	労 働	絵 画
木	ロシア語	数 学	労 働	絵 画	日 本 語	
金	ロシア語	数 学	読 み 方	課 外 の 読 み 方	ダ ンス	

\*村田氏によると、日本語が導入されている1年B組の時間割は次の如くであった。

金曜の4限の科目名はフニェクラーズナヤ・チチェーニアである。1日6時限の日がある一方、

土曜日には授業がない。つまり、学校5日制が実施されているらしい。

私たちは、うかつなことにロシアの学校5日制について何も調べなかった。帰国後に一橋大学の関啓子氏に尋ねたところ、次のように教示して下さいました。

「1981年9月から、各共和国の実験学校・学級で5日制が試行され始めました。しかし、当初、父母の反対などがあったと聞いています。地域によっては、もっとはやくから試行されていたかも知れません。

1988年5月26日の国民教育国家委員会命令No85によって、低学年（4年生まで）に5日制が認められることになりました。学校の裁量で条件の整っているところから5日制に移行してもかまわないことになりました。

現在では、低学年に限らず、各学校の裁量により、5日制を導入しているようです。昨年、モスクワにしばらくいて、学校見学をした時にも、5日制に移行したところがありました。」

1年生が日本語の授業で現在使っている教科書は、『ひろさんの たのしい にほんご』（凡人社）である。根本牧・屋代瑛子署名の「はじめに」によると、これはインドシナ半島の難民の子どもたちの日本語教材として開発されたものである。私はこのような教科書をあれこれ評価することはできないけれども、もし国立国語研究所のような公的な機関が編集すれば表題は「にっぽんご」とするようにおもわれるし、また表題からすればこの教科書は女兒用のようにおもわれるという疑問もある。実際、開巻3頁目には「おてあらい」といういわゆるおんなことばが出てくる。クラスは男女で構成されていたから、ことさらに女兒用教科書を使う理由はない、などの疑問もある。どういうルートでこういうテキストがロシアに入ったのかわからないけれども、同校の校長や教師が日本との交流をもとめる気持ちはわかるような気がする。

なお、3年生の時間割表は次の如くであった（担任教師に手書きしてもらったもので、村田

	1	2	3	4	5
月	読み方	ロシア語	数 学	体 育	理 科
火	ロシア語	読み方	労 働	理 科	数 学
水	絵 画	数 学	ロシア語	音 楽	読み方
木	読み方	労 働	数 学	体 育	ロシア語
金	課外の 読み方	数 学	ロシア語		

氏の教示による）。

ここに理科と訳したのは、プリラドベジェーニャで、「自然」とした方がよいのかも知れない。

ハバロフスク市民の間での日本語学習への関心は高く、この学校には、上記のいわば正規の課程での日本語学習のほかに、教師、大きな子ども、親のための3つの日本語クラスが開設されている

由。親自身にも学びたい希望が多いのだけれども、教えることのできる人が少なく、希望に応じられないのだという。私たちが参観した日本語の授業をしていた教室の片隅には、数冊ずつの『コンサイス露和辞典』、『コンサイス和露辞典』のほか、わが国の国立国語研究所が刊行している『日本語教育映画・基礎編』の「れんしゅうちょう」や「教師用マニュアル」などの資料が並べられていた。

この学校での質疑のなかでも、最近における親の経済負担が一つの重要な話題になった。近い将来授業料をとるようになるかも知れないと聞いたのだがという質問については、以下のような回答があった。有名な「冬よさようなら」のような子どもたちのお祭り行事に際して、親たちが道具や材料、労力を提供して協力するなどということは、最近になってからのことだという。また、フランス語や日本語のような特別の授業を開設する場合には余分の費用がかかる（この学校でフランス語を開設しているかどうかは聞かなかった）。こういう費用については政府から補助金も出るけれども、現在、親たちは月15ルーブルを負担している。親たちはもっと負担してもよいから続けてくれと言っているという。

ロシアの学校の夏休みは6、7、8の3か月。親が休暇に出かけるときはその費用の30～50%を労組が援助する。子どもがピオネールキャンプに参加するときは、政府や労組がその費用を負担し、親に負担はかからなかった。校長は、「これからは企業や労組がどの位負担してくれるか心配だ」と言っていた。ことしの夏にどうなるかの見とおしは立っていないごとくであった。

### 第12番中学校

28日（土）に訪問した同じ中央区内にある第12番中学校においても、日本語を習いたい・習わせたいという父母の要求が強いのので、今年度つまり92年の9月から日本語教育を導入する予定だという話を聞いた。

この第12番中学校は、ことし9月に創立30周年を迎える11年制学校である。校長のワシリーエヴァさんは日本の学校体系を知っているらしく、11年制学校は日本の小学校・中学校・高等学校の課程をふくんでおり、第1～4学年が初等教育、第5～11学年が中等教育です、と説明した。現在の生徒数1,200名、1年に約80人が卒業するという（この学校では、9学年修了後に中等職業技術学校や中等専門学校にすすむ子どもの割合を聞かなかった）。この学校では2部制をとっている。午前組は8時30分から12時20分までの由。（全学年が2部制なのか、午後は何時に始まるのかなどは聞ききこねた。）

教育のプログラムについては、ロシア連邦の教育省が基本を決めている。しかし、地方の学校では、その必要に応じたプログラムを定めることができる、と校長は言った。この学校の教育課程についていうと\*、低学年では人文科学的な課程が重視され、高学年では数学と物理を強化したコースを置いている。ただし、物理や数学を嫌いだという生徒にむりに履修させることはしない。また、1年生から英語を選択させており、そのほか、高学年ではドイツ語と英語を選択できる。冒頭に紹

介したように、日本文化に対する父母の関心が高く、ことしの9月から日本語教育を導入する予定だとのこと。

\*ここでは、校長のことは通りに紹介するにとどめざるを得ない。この学校についても教育課程表を入手できなかったもので、詳細は不明な点が多い。

毎年の11学年卒業生から15~20名がハバロフスク教育大学や教育専門学校\*に、10名位が医科大学に、10~15名が技術系の大学に入っている。学校はこれらのことを誇りにしている。これは9~11学年で数学や物理を強化している成果だともう、と校長はのべた。

\*教育専門学校は9学年修了者を入学させる4年課程と理解していた。この校長の言うとおりだとすると、教育専門学校にも、後述のテクニックと同様に11学年卒業者を入学させる課程があるのであろう。

この学校のおかれている地域の親には国家公務員や地方公務員が多く、またあまり異動がないという。インテリゲンツィアが多く、労働者は少ないとも言っていた。

労働科の授業は、第1~4学年では週2時間、第5~9学年では4時間、10~11学年は週6時間である。10~11学年の労働科の授業は、週1日、中央区の教育-生産コンビナートに通い、そこで指導を受ける。

教師は48名で、うち男性は5人の由。校長のワシリーエヴァさんはこの学校で26年働いているベテランである。他の教師も経験豊かな者が多く、平均勤続年数は13年だという。副校長は3名おり、2人は授業に関する事項を扱い、他の1人が教育-生産コンビナートとの折衝をふくむ校内の管理業務を扱う。校長をふくむすべての教員は労働組合に加入している。労働組合は、年次有給休暇の獲得、病気の際の療養費の補助、休暇の際の旅行券の補助、住居のあっせん、給与の引き上げなどの仕事をしている。しかし、まだまだ教師の給与は低く、教師の生活は経済的に苦しい、と校長はのべた。

第1~4学年の担任教師は、原則としてすべての教科を教える。第5学年以上の授業は各教科の教師が教える。前者は教育専門学校出身の教師、後者は教育大学出身である。ただし、教育大学出身者は低学年を教えることがあっても、給料は高い(高学年担当者と同じという意味らしい)。

校長はこのほか、教師のなかのメタディストについてかなりくわしい説明をしてくれたけれども、その選考過程やメタディストの役割につきよく理解できなかったもので、ここでは割愛する。

私たちは、労働科を中心にいくつかの数の授業を参観した。低学年では手しごとを重視すると言っていた。高学年の労働科の授業は、なぜか、裁縫や壁掛けのような手芸品を作る女子のみの授業が多かった(金工室も見たが生徒はいなかった)。「学校市場-製品の見本」という看板を掲げた部屋には、伝統的民芸品の見本がたくさん並べられていた。布製品が多い。これらを父母に見せ、注文を受けて作るとのことであった。裁縫の教室には、縫製工場から買ったという武骨な足踏みミシンがあった。こういう機械の水準は日本より遅れているので、日本でいらないものがあつたら買いたいとおもっていますと校長は説明していた。

職業指導の教室ものぞいてみた。そこにいたのは第11学年の女生徒だけである。男子は教育一生産コンビナートに行っている由。この学校では、おしなべて、労働科の授業は性別に分割されているようにおもわれた。

## 6 労働教授は学校と教育一生産コンビナートで

第12番中学校で聞いたところでは、毎週の労働科の授業は、第1～4学年では2時間、第5～9学年では4時間、第10～11学年では6時間であった。

2つの中学校で見た労働教授の授業は、低学年ではわが国の工作とあまり変わらず、金属加工が重視されているらしいことが特徴かとおもわれた。金工室なども、わが国の技術科室とそう変わらない印象だった。私たちには見る機会はなかったけれども、あとから1日だけ1人で第3番中学校に行った村田豊美氏によると、低学年の児童がコンストラクトールと呼ばれる金属片の組立て玩具を使っている授業もあったという。

中学年以上になると、労働教授の内容は、子どもの希望によるといはいたけれども、実態は、男子は金工、女子は手芸と分かれているようだった。高学年の労働教授は、その全部が教育一生産コンビナートで行われているらしい。

教育一生産コンビナートは、わが国にはない施設である。

私たちの訪問した鉄道区のコンビナートは、1976年の創設で、近隣の2校の中学校の5～9年生と、区内の18校の中学校から10、11年生が週1日通ってきており、生徒数は2,688名に及んでいる。(分校が2校ある由だから、他校の低学年生は分校に通うのであろう。)このコンビナートで教育している専門(スペツィアリノスチ。職種とか職業などとも訳される)は、①旋盤、②仕上げ、③木工、④電気、⑤ラジオエレクトロニクス、⑥ラジオ組立て、⑦あみもの、⑧秘書、⑨コック、⑩看護婦、⑪焼きもの、⑫売り子、⑬ピオネールのサークルの指導者……等の18種にわたっている(以前はもっと多かった由)。

看護婦は中等専門学校で養成されるいわゆる専門職であり、コンビナートにおかれた専門としては疑問もある。メディチンスカヤ・セストウラとっていたから訳せば看護婦に違いないけれども、看護助手のような仕事であろう。このほか、授業をみてまわった所では、ミシン縫製、手芸などの授業があった。タイプライタの授業は秘書の課程であろう。

5～9学年生は、半年ごとに学ぶ専門を変える。10、11学年生は同じ専門を学ぶ。学ぶべき専門は、生徒の希望によることを原則とするけれども、定員の関係で他へ廻されることもあるという。実際には、男子の選ぶ専門と女子の選ぶ専門はかなりはっきり分かれている。女子が男子の好む専門(旋盤、仕上、木工、等)を選ぶことはあまりないが、男子が女子の好む専門を選ぶ場合はあるという。

卒業時に試験を受けて職業上の資格をとる生徒もいる。そういう生徒は、夏休み(といってもロシアでは学年末休み)に120時間工場で実習する。試験は、工場から専門家が来て、実習、製品の

審査、口頭試問で行なわれる\*。

\*何級の資格なのか尋ねなかったのはうかつであったけれども、3級をさすのであろう。1982年にキーロフ区の教育・生産コンビナートを視察した際の報告では、「コンビナートでも、終了までに2級のグレードの資格はみながとれる」、3級については、「コンビナートで優秀な生徒には、30%のワク内で、試験に合格した場合与えられる」とのべられている（長谷川雅康「学校共同教育・生産コンビナート」『技術教育研究』第22号、36、37頁）。福田誠治もつぎのようにべている。「第1等級は、非熟練である。いわば、何の訓練も受けずに、見習いとして働く場合である。第2等級は、半熟練である。普通教育学校の生徒が学校共同学習生産コンビナートで学ぶと、この等級が与えられる。この場合、とりわけ成績がよければ、第3等級の取得も可能である。第3等級以上は、一般的に熟練とみなされる。第3、4等級は、職業技術学校で養成される。うちこの養成段階で成績優秀者は、第5等級となるのも可能である。第6等級は、一般的に最高位である。これは、働きながら、資格を向上させることでえられる。」（福田誠治『ペレストロイカにみる教育改革・教育の再編』1990年、ぎょうせい、214頁）

かなり多くの実習中の授業を参観した。旋盤作業も見た。パイトの研磨は指導員が行なう由であった。生徒の使っているミシンのモータがわが国のそれよりも大きく、つけ方が武骨な感じがあったので、足踏式を改造したのかと尋ねたところ、はじめから附いているものだとのことであった。木工場で加工中の素材は生乾きで、これで売物になるのかと心配になるくらいだった。わかっているけれども、乾燥機を備えるお金がないのでやむを得ないのだという説明だった。

労働による収入は、40~45%を指導者と生徒に、残りをコンビナートに配分するという。コンビナートはこれを工具や備品の購入にあてるらしい。最近では生徒もこの稼ぎをあてにしているという。校長がこの方式を「独立採算制」と言ったので、誤解が生ずるところだった。

指導者（コンビナートの教師）は現在25名。以前はもっと多く、講義と実習とを別の指導者が担当することが多かったけれども、現在は別になっているのはラジオエレクトロニクスだけで、他はすべて1人の指導者が両方を指導しているという。指導者の給与は、1人平均月1,240ルーブルとのことであった。

校長に将来の見とおしを尋ねると、労働教育は大事だから、学校のそれもコンビナートも残ると思う、もっとよくするために物質的な土台をしっかりとしないといけない、と言っていた。

前回訪問の際と同じく、総合技術教育ということばを聞くことはできなかった。

## 7 設備更新のおくれる中等職業技術学校——第30番パーテーウー

「ここは船大工の実習工場です。しかしいまはある企業に貸しています。企業が払う借用料を学校の収入にあてているのです。これは、仕方がないことです。あそこに働いているのは企業の労働者です。」とワシリーリエフ・ウラジミール・ワシリーエヴィッチ校長は言った。傍らには、子ども用ベッドの中間製品が積みあげられていた。第30番中等職業技術学校の実習工場を視察していた

ときのことである。ペーテウーが置かれている位置を象徴する情景であった。

第30番ペーテウーは、造船工場に卒業生を送り込むことを目的として、1966年に創立された学校である。工業区の海軍造船工場\*に隣接している。従来はこの学校も公開されていなかった由である。この工場は、最近軍のものだけでなく、民間の漁船などの小さな船や家具も作っている。創立以来1万2千名の卒業生を送りだしてきた\*\*。

\*シベリア大陸の中にあるハバロフスクに海軍の造船工場があるのは奇妙な感じがしたけれども、アムール河の広さを知って納得がいった。岸辺に立った時ははるかに見えた黒い影は向こう岸ではなく河中の島だったのだ。

\*\*通訳は「1万2千名の技術者を送り出してきた」と紹介した。原語は聞きとれなかったけれども、これは誤解を招きやすい。ペーテウーの卒業生は労働者であり、チェフニクやインジェニールではないからだ。

この学校は、毎年360名の新入生を受け入れる。9学年修了者が基本で、その修業年限は3年間である。しかし、11学年卒業生も受け入れており、その修業年限は1年である。11学年を卒業してきた者には専門学科だけが、また9学年を修了した入学者には普通学科と専門学科とが課される\*。

\*ここで通訳のミーシャが、最近では11年制の義務教育を終了しなくてもよくなったので、9学年を終わってから入学する者にも、専門学科だけを学ぶ者もいる、とつけくわえた。このことばを、私は奇異に感じた。義務教育年限が9年になった（切り下げられた）ことを知らなかったからである。

この学校で教える専門は、電気溶接、船大工、旋盤、仕上げの4つで、溶接にはとくに注意を払っている、といていた\*。

\*この専門（スペツィアリノスチ）の名称は、前述の『ハバロフスク市の高等教育施設、テクニクム、ペーテウー』に掲げられているものと違っている。通訳が意識したものであろう。

校長は、校内見学後の質疑のなかで、現在の生徒総数は460名で、うち女子は3名に過ぎないと答えている。この学校には入試はなく、希望者は全員受け入れている、最近の若者には何かの理由で勉強の嫌いな者がふえている、などとも言っていたので、入学者は定員に満たないということかも知れない。

勉強の嫌いな生徒がふえた関係でさまざまな困難をかかえるという事情は、日本の工業高校と同じらしい。生徒は、一般的傾向としては、普通科目よりは専門科目を好んでいる、しかしもっと勉強して上級学校に行きたいとおもっている生徒は普通科目に熱心にとり組んでいる、と言っていた。

授業料は無償で、生徒の寄宿舎の食費、寄宿費は国が補償している。

生徒たちは、月に342ルーブルの奨学金をもらっている。このほか、工場実習による収入は、50%が生徒に、50%は学校に配分される。ただし、11学年を卒業して入学してきた1年課程の生徒は



全額受けとる。その額は1500～2000ルーブルに達する\*。こうして9学年修了者と11学年卒業者とは、収入に大きな差がある、と校長は言っていた。

\*11学年卒業者は、実習収入の面では1人前の労働者として払われることを意味するようにおもわれる。それにしてもこの額は、前述の幼稚園の教師の給与（1000～2000ルーブル）やウーペーカーの指導者の給与（平均1240ルーブル）より多い。念のためテープを聞き直してみたけれども、訳し間違いではなかった。ある意味ではかんじんのこの学校の教師の給与を聞かなかったのは、うかつであった。

校長は、生徒は年に40万ルーブルくらい稼いでいるとも言っていた。この金額は、計算してみると、どうやら全生徒が働いて得る収入のうち学校の収入となるものをさしていたようにおもわれる。

生徒には女子が少ないのに、教師の50%は女性である。ただし女性教師は普通教育科目担当者に多い。

卒業後の進路も、最近の様相が変わっているらしい。

卒業生は、従来は、いわばこの学校の主人である造船工場に就職していた。しかし最近は、この海軍の工場も人員を縮小する傾向にあるので、他の方面にも就職できるよう学校としてもがんばっている由であった。

なおこの学校の卒業生は3級（トゥレーチー・ラズリャード）の資格をもらう。就職後、3級から4級に上がるには、本人に希望があってよく働けばのことだが、半年から1年かかるということだった。さらに4級から5級、6級とあがる期間は一定せず、本人が腕が上ってきたと自信がいたら、みんな（原語ではコレクチーフといっていた）が集って決める、と説明された。

卒業後、上級学校（工科系の大学）に進学する者は多いという（数字を聞きそこなった）。従来は、卒業後2年間働く義務があったので、上級学校進学はその義務の終了後であった。ところが義務制がなくなったので、いまは、卒業後すぐに進学できる。進学先は通信制ではなく、全日制が多いという。

学校は、普通教室（すべて各教科ごとなので、いわばわが国の特別教室にあたる）と各種の実習室を備えている。生徒は、1か月の半分は学校で学び、半分は隣接の造船工場で実習する。学校の電気、上下水道、暖房等の費用は工場が負担する。

2年前から独立採算制になり、機械の更新や修理は学校の責任で行なうことになった。実際にはなかなか思うようにいかない、困難な時代だけれども、工場も学校もがんばっている、と校長は言っていた。独立採算制ということばが使われたけれども、教職員の人件費は基本の予算から支出される。

私たちが見せてもらった教室は、生徒の人数が少ないためわが国の教室よりせまく、どこも展示物などがきちんと整備されていた。

最近になって科目の内容が最も変わったのは歴史で、教科書はあるけれども、第二次大戦後の部

分は全く使いものにならない、自分で調べ、考えないと教えられない、と歴史の教師（女性）は言っていた。このため、ハバロフスク市内でもセミナーなどは毎週のようにやっており、昨年10月にはサンクト・ペテルブルグの会議に行ってきたとも言っていた。そのほか、以前は歴史の教室だった部屋の一つを社会経済学（オプシエストゥベジェーニア・エコノミキ）の部屋に変えたという。ここで、日々変わる新しい動きを教えているというから、かつてわが国の高校にあった「時事問題」か、最近の「現代社会」に相当する科目であろう。

製図の教室ものぞいたけれども、ドラフタのようなものは見えなかった。

コンピュータ（パソコン）の入った小さな教室ものぞいた。コンピュータ1台に生徒1人ずつついていた。正規の科目でやるほか、希望者によるサークルが2つあるとのこと。プログラム言語はBASIC。私たちがのぞいた時にいた生徒は10学年生（14歳）で、ゲームをしていたようだった。同行した衣川洋一氏は、「我々の見た限りどのパソコンも同じタイプの黒っぽいもの。キーボードのキーには英語とロシア文字が打たれており、フロッピーディスクは使えないタイプ。そのケースには「YAMAHA」の銘板が打ってあった。MSXであったか確認はできなかったが、どうやらMSXの技術をそのままロシア用に改造したものと推測される」とのべている。メモリー容量は64キロとのことであった。

各種の実習工場の機械類は、いずれも古く台数も少ない。旋盤は1960年代のものだと言っていた。更新が遅れているのだ。重視しているという溶接の工場（ショップ）では、たまたま実習はしていなかった。生徒が溶接した、いかにも無骨な作品を見せてくれた。半年習ったあとで2日間でやった作品としたらまあまあだ、と自らも工業高校で教えている高橋伊佐夫氏が言っていた。

校内を視察している折、田中喜美氏が何人かの教師に経歴を尋ねていた。物理の教師（女性）はハバロフスク教育大学、製図の教師（女性）はハバロフスク工科大学出身で、実習を担当していた教師（見た限りではすべて男性）は、造船テクニクムの出身の人が多く（この中には後に大学の通信教育を受けた人がふくまれる）、ほかに軍隊（陸軍）の学校出身者、普通学校から工場附属のペーテウーを経たいわば工場でのたたきあげの専門家などがいた。

質疑応答のさいごにワシーリエフ校長も、同じような専門を教えている日本の学校とのさまざまなかたちでの交流を望んでいる、教育方法などさまざまな面で学び合えらとおもうからだ、とのべた。

#### 教育機関の補助的財源

私たちは、ペーテウーや教育-生産コンビナート（ウーペーカー）で、生徒の労働による収益が学校の補助的財源にあてられていることをみてきた。また私たちは、後述のように鉄道テクニクムが学生寄宿舎の一部を企業に貸したり、第30番ペーテウーが実習工場の一部を企業に貸したりしているのを見てきた。第12番中学校で生徒の作品を売るといふ話も聞いた。

帰国してから調べたところ、これらは、ソ連邦国家教育委員会の1990年1月17日付命令「国民教

育における財政メカニズムの基本規程」に準拠した措置らしい。すなわち、同規程によると、学校の財源は設置者たる省庁が措置する予算のほか、以下のような収入が国民教育機関の補助的財源とされる（文部省大臣官房調査統計企画課『主要国の海外動向・1990-1991年（海外教育ニュース第11集）』1992年、267-268頁）。

○国、協同組合、公共企業・団体との契約による、または住民からの注文に応じた財・サービスの提供に対する収入。

○教育・生産活動において生産した製品を換金することによる売上金。

土地、建物、設備を賃貸することによる収入。

○契約による要員養成、資格向上、再教育及び住民の注文に応じた教育に関する補助的サービスによる収入。

○国、協同組合、その他の公共企業・団体及び個々の市民からの寄付及び物資的財産の譲与。

この規程は1990年中に実施すべきものとされていたから、ロシア連邦にもそのまま継承されたのであろう。私たちは、その運用の実態を見せられたわけである。

## 8 建物を日本人が建てた第7番中等職業技術学校

私たち1行中の最年長者である藤下悌彦氏は、敗戦から1949年10月に復員するまでの4年間、シベリアで抑留生活を送った人である。藤下氏は元来歯科医であるけれども、電気関係の技術にくわしかつたので、日本製の映写機（100v用）を220vのソ連で使えるよう改造したなどの腕を買われて、シベリアのあちこちの抑留所を巡回したというやや特異な経歴をもっておられる。ロシアを訪問するのはこの度が3回目（藤下悌彦『シベリアに眠る戦友の墓参』1989年、私家版）、ロシア人を愛し、ホームステイをしたこともあると聞いていた。

ところで、私たちが訪問した第7番職業技術学校の校長のイワン・アナトーリー・イワノヴィッチ氏は、恐らく1行中に藤下氏のような人がいるとは知らずに、開口一番、「この学校の建物は、1948年から52年までの4年間にわたって、日本人が建てたものです」とのべた。シベリアに抑留されていた日本人が建てたというのである。学校はれんが積み・モルタル塗り・2階建て、廊下が少しせまいように感ずるけれども、がっちりした建物である。こんなところにも日露間の歴史が刻み込まれているとは驚きだった。なお、この学校は1982年のハバロフスク視察の際にも訪れた筈だけれども、その時にはこのようなことを聞かされた記憶がない。

この学校で養成する専門は、電気（エレクトロニクス）、電気機械（エレクトロメカニク）であり、生徒数は600名でその殆どが男子であると校長は説明した。校内見学の中で、このほかに郵便オペレータのコースのあることを知った。特定の企業に卒業生を送ることを目的としている造船オペレーターと違って、いろいろな企業に卒業生を送り出している、と説明された。

生徒の大部分は9学年を修了して来た者である。しかし約30%は11学年卒業生で、彼らはここで専門により異なるが1～2年間学ぶ。少数だが、兵役終了後入学してきた者もいる。前述の郵便オ

ペレータのコースと電気機械のコースは、11年卒でその修業年限は1年間である。

11学年卒業者と9学年修了してから来る者とどちらが優れているか尋ねたところ、専門は9学年修了で4年間\*勉強した方が優れており、普通科目は11学年卒業の方が優れている由であった。

\*ペレーターは9学年修了者を受け入れて3年間教育するコースを基本としている、と私は理解していた。ところがここでは9学年修了後4年間勉強する者と言っていた(訳し違いではない)。年限だけでいうとテクニクムと同じになるコースがペレーターにもある、ということになる。

1学年に6つのグループがあり(この「グループ」ということばがわが国の「学級」にあたるらしい)、実習の時にはこのグループは2つに分かれる。

質問する私たちの側に工業高校というイメージがあったので、勉強嫌いな子がいて困ることはいかと尋ねたところ、同じような悩みはある、ただし、実習に行き自分のレベルが低いとわかると、もっと勉強しなければならぬとおもうようだという話であった。しかし、稀には専門が向いていないとおもわれる生徒については、相手校と相談のうえで他のエス・ペレーターに転校させることもあるとのことであった。

極めて希には落第する者があるけれども、殆どは4年で卒業する。その卒業の時に、成績によって2級になったり3級になったりする、ということであった。

教師は70名、うち女性教師は30名である。女性教師の大部分は普通教育科目担当である。ちなみに、校長は鉄道大学卒で、企業で働いた経験をもっている由。

実習を指導する教員はマースチュエル(英語のマスタ、ドイツ語のマイスタにあたる)と呼ばれる\*。日本の高校でいえば実習教諭に相当しよう。マースチュエルのなかには、大学を出てプレポダバーチェリ(ロシア語でいう中等学校の教師)の資格をもっている人もいる。日本でいう実習助手にあたる職員はいないようであった。

\*草野隆光氏が、マースチュエルというのは通称なのか役職なのか尋ねたところ、役職(ドルジノスチ)だとのことだった。

ここの学校の見とおしを尋ねたところ、卒業生に対する需要は多く、実際に殆どの卒業生が自分の学んだ専門を生かす職場に就職しているので、縮小するようなことは考えていないということであった。

## 9 リツェイ—新しいタイプの学校

私たちは、「商業リツェイ」と呼ばれ、商業科と技術科とを併置する学校を訪問した。このリツェイの修業年限は、11年制中学校卒業後2年間、または9年制修了後4年間である。商業科で教えるのは、商業、会計、商店の経営の由。技術科で教えるのは、コック、食料や料理のマネジメントである。

この4年課程は中等専門学校(テクニクム)に相当するけれども、2年課程は日本の短期大学に

相当するもので、以前の技術学校（略称はテウー、詳細は後述）にあたるのかもしれない。生徒数は計700名。男子は20%。昨年9月に発足したばかりの学校であるから、旧制度の生徒数をふくんだ数字であるようにおもわれる。70名の教員と20名の職員がいる。この学校の人気は高く、入学は4人に1人という厳しい競争だったという。

この学校でも、授業中の校内を視察した。料理の原価計算をしているいわゆる座学の授業、ケーキや菓子を焼いている授業、食品の質（栄養価？）を調べているところ、レジスターの操作、等々である。たまたま試験をしている教室もあった。解答した答案を持って教師の前に座り、口頭試問を受けている（すなわち筆答のうえで口頭試問を受けている）ところだった。他方、実習施設の一環らしいけれども、校内に喫茶店（バー？）の施設があったのには驚いた。

リツェイは、ハバロフスクにはまだ1校しかないけれども、近い将来もっとふえるであろうともいわれた。なお、この商業リツェイの前身校＝第41番中等職業技術学校が教育していた専門は、前掲『ハバロフスク市の高等教育施設、テフニクム、ペーテウー』によると、①料理人、②菓子製造人、③食料品の販売員、④工業的商品の販売員、であった。これらが技術科に継承されたのであろうか。

リツェイというと、私たちは、ロシア人が敬愛してやまない詩人プーシキンが学んだ学校を想いおこす（ハバロフスク教育大学の玄関前には詩人の像があった）。学校名も自由化された証の一つなのかも知れないけれども、教養主義の伝統に支えられた由緒ある学校名がこのような職業教育をおこなう新しいタイプの学校名に採用されたことを、私はいささか奇異に感じた。

#### 新しい学校制度の創設——リツェイ、カレッジなど新しいタイプの学校

私たちがハバロフスクで視察した学校のなかには、商業リツェイという新しいタイプの学校がふくまれていた。また、私たちが訪問した電気通信テフニクムでは、この学校は近くカレッジと改称する予定であるという話を聞いた。リツェイ、カレッジは、いずれも、10年前にはなかった新しいタイプの学校である。新しいタイプの学校としてはこのほかに、私たちは訪問しなかったのでハバロフスクにあるかどうかは不明だけれども、ギムナジアと称する学校も生まれているらしい。

こうした新しいタイプの学校について、つぎのような解説があったので紹介しておく（前掲『海外教育ニュース第11集』282頁）。

「ギムナジア」は、通常第1～11学年を対象とし、古典などの人文系の教育を重視した教育を行なう普通教育学校の名称である。一方、「リセ」は、通常第8～11学年を対象とし、人文系の教育にも力を入れながら理科系の教科に重点を置いた英才教育を行なう普通教育学校と、特定の職業分野に関わる教育を行なう中等専門学校及び職業技術学校につけられている名称である。また、「カレッジ（高等職業学校）」は、大学1・2年レベルの高度な専門教育を行なう新しいタイプの中等専門学校である。これらの新しいタイプの学校は、いずれも、1989年度より各地に開設されはじめた。

私たちは「リセ」というロシア語を聞かなかった。ここでいうリツェイにあたるのであろう。これによると、リツェイには、多様な形態があり、①第8～11学年対象の英才教育を行なう学校、②特定の職業分野の教育を行なう中等専門学校あるいは職業技術学校などがふくまれるらしい。高杉一郎が1991年7月にシベリアのタイシュットで出会って次のような会話をかわしたりツェイの学生は①のタイプのそれであり、私たちが訪問した商業リツェイは②のタイプのものであったことがわかる。いずれにせよ、こうしたタイプの学校の出現は1989年度以降のことで、教育におけるペレストロイカの一環をなすものである。

「リツェイというと、プーシキンがツァールスコエ・セローで学んだ貴族の子弟のための学校でしょう。あたらしいリツェイは、えらばれた階級の子弟だけでなく誰にでもひらかれているのですか?」「だれにでもひらかれています。そのために、入学試験競争が非常にはげしいのです。」

(高杉一郎『シベリアに眠る日本人』岩波書店、1992年、76頁)

## 10 苦悩する鉄道テフニクム

「この10年の間には国家も変わったし、鉄道も変わった、鉄道テフニクムをめぐる環境もは大きく変わっている」と校長のグリツォフ氏は話し始めた。同氏は、私たち(といっても今回の視察団では草野隆光氏と私の2人)が、前回もこの鉄道テフニクムを訪問したことを記憶していたからである。

今回私たちは多くの教育施設を訪問し、それぞれの責任者から様々な話を聞いた。そのなかでは、鉄道テフニクムでの話題は最も深刻だったようにおもわれる。

ハバロフスク鉄道テフニクムを設置・管理するのは鉄道省である。この学校では、現在鉄道関係の5種の専門を教えている。(10年前は7種だった。)

この学校には全日制課程のほかに通信教育課程があり、また、このテフニクムに属する技術学校がある\*。これら全体を合わせた学生数は約2000名である。

\*グリツォフ氏は分校が4つあるともいっていた。この分校が技術学校をふくむかどうかは判然としなかった。

なお私たちは、今回の視察では技術学校(チェフニーチェスキエ・ウチーリシヤ)というタイプの学校を訪問しなかった。前述の『ハバロフスク市内の高等教育施設、テフニクム、ペーテーウー』には記載がないので、ハバロフスク市内にはないのかも知れない。学制改革以前は、10年制学校卒業者に1～2年の職業教育を施す学校として知られ、1977年にはソ連に835校あり、49万2千の生徒が学んでいた。

全日制課程の学生数は900名、大部分は男子で女子は10%に過ぎない。鉄道関係の仕事はきびしいので女子は少ないのだという。通信制課程は、すでに働いている者の(資格の)レベルを高める課程である。(全日制の)修業年限は、第9学年修了者は4年、第11学年卒業者は3年間である。

学習の40%は実地で行われる。すなわち卒業までに、4か月間、半年間、および卒業論文を書く

前の1か月半という3回の実習が行われる。

学生は、月に447ルーブルの奨学金が与えられる。なお卒業後の就職を予約している学生には月に1000ルーブル与えられる。学生は、制服は無償で支給され、年1回は無料で150Km以内の鉄道を利用できる。なお成績優秀な卒業生は、無試験で鉄道大学の第3学年に編入できるという。

教員は110名で、平均46～50歳。教師の50%は専門の大学だけでなく、教育大学も卒業している。教師のほかに130名の職員が働いている。

最近における変化は、財政面、教育面ともに顕著だ。学校が必要とする予算に対して鉄道省が割り当ててくる予算がひじょうに少ないという問題がある。卒業生に対する需要が少なくなっているので、養成すべき人数を減らし、割当て予算を減らしてくるらしい。ことしの9月からは学生を半分に減らすことになる筈だと校長は言っていた。

こうなると、校長はビジネスもしなければならぬし、他の学校とも競争しなくてはならないなど、きびしい状況に追い込まれている。前者についていえば、このテフニクムでは寄宿舍の1フロアを北朝鮮の貿易代表部に貸して年に70万ルーブルの収入を得ている。このほか、学生の寄宿舍は夏休みには空くので、この間をホテル代わりに利用することも考えているという。競争というのは、違うテフニクムでも同じ専門を教育していることがある——実際、たとえば通信関係の専門は鉄道テフニクムと電気通信テフニクムで養成している——ので、人材を育てる競争をしなければならないのだという。

こうした事情からみて、現在17校あるハバロフスク市内のテフニクムは、倒産が続出して5年以内に半分くらいになってしまうだろうとも言っていた。

教育面での変化も大きい。もともと教育計画（プログラム）はほぼ2年毎に改訂されてきたらしいけれども、最近は、基本的なことは依然としてモスクワで決めてくることにしたがいながら、細目は実状や要求に合わせて自分たちが作っている、とのことであった。

## 11 カレッジ化の動き——電気通信テフニクム

テフニクムのすべてに、鉄道テフニクムで見られた危機感があったわけではない。私たちが訪問した電気通信テフニクムの表情は、むしろ明るかった。

電気通信テフニクムが養成する専門は、①無線通信、ラジオ放送、テレビジョン、②自動化された電気通信、③多重電気通信、④郵便通信、である（前掲『ハバロフスク市の高等教育施設、テフニクム、ペーテウー』による）。

このテフニクムには、全日制に約800名、通信教育課程に約1000名が学んでいる。卒業生はハバロフスク地方からサハリンに至る極東の広範な地域に働く。卒業するのは5月だけれども、前年中には大い就職先が決まっているという。

テフニクムは、9学年を卒業して4年間学ぶタイプが基本と私は考えていた。ところがこのテフニクムは、今年度つまり昨年9月から、11学年卒業生を受け入れて2年7か月の教育を行うように

なったという。テクニクムとしては新種である。テクニクムのはんちゅうにとどまるのではなく、モスクワの本省（通信省）の許可があり次第カレッジと改称する予定だという（ロシアにおけるカレッジ化の動きについては前述した）。ただし、改革後の教育水準はあまり変わらないらしい。この改革の要因としては、ひとつは、4年という年限は長いので早く教育してもらいたいという要求が強まっていること、もう一つは、極東地域には東シベリアにあるノボシビルスク電気通信大学の他には電気通信関係の大学はないので\*、広い地域から要求されていることがあげられるという。

\*ノボシビルスクには電気通信テクニクムもある。これをさしたのかも知れない。

実際に調べてみると、ハバロフスク市だけではなく、この広いハバロフスク地方には他に電気通信関係のテクニクムはない。僅かに、鉄道テクニクムの中に無線通信関係の専門があるだけである。大学についていうと、ハバロフスク市内の大学には電気通信関係の専門はない。こうした事情が、エレクトロニクス時代たる現代におけるこのテクニクムの役割が増大しているのであろう\*。

\*『大学入学便覧・1991年版』によると、旧ソ連邦傘下には、ソ連邦通信省の設立する電気通信大学は6校しかなかった。日本などと違って大学（インスティテュート）自体が専門分化しているから、電気通信関係の専門家が他の大学で養成される可能性は小さく、あったとしても少数であるとおもわれる。ソ連邦の経済は計画的であった筈なのに、エレクトロニクス時代にはたちおけているといえるのではないだろうか。

もっとも、11学年卒業者を入学させる方式に切替える（た？）テクニクムは、ハバロフスク市内17校中5校に及ぶというから、カレッジ（日本の短期大学に相当する）化の動きは、一方で需要のないテクニクムはつぶれるだろうなどといわれるなかでの、もう一方の新しい動きとみてよいのであろう。

予定された時間に制約され、大急ぎで校内の教室、実験室を見学した。専門でないから確言はできないけれども、電話交換機などはわが国の一世代か二世代前のもののような印象を受けた\*。教室や実験室の展示物、実験装置はよく整備されていた。常設の技術史展示室が充実しているのには驚嘆した。1926年製のラジオ、1949年の、つまりハバロフスク最初のテレビジョンなどもある。ハバロフスク通信局長が収拾したコレクションが基礎となっている由であった。

\*少し古い装置や機械の方が原理を教えやすいということもあるから、学校の実験設備の水準が現実社会の水準であるかどうかをにわかには判定できない。しかし、近くアメリカの会社の技術援助を得てハバロフスクの交換機は更新されることになっている、と校長が言っていたところをみると、現実の機器の水準もおくれているのであろう。

会談の最後に、電気通信テクニクムのマギーレ校長もわが国との交流を望んでいたことをつけくわえておこう。

## 12 ハバロフスク工業テクニクムの専攻は建設材料工学

私たちが訪問した学校の一つに、「工業テクニクム」（原語はインドゥストリアルニイ・テフニ



クム)があった。鉄道テクニクムや電気通信テクニクムは、その名称からある程度は内容を推測できる。しかしこの工業テクニクムという名称はいかにも漠然としていて、名称だけでは何の専門を養成する学校なのかわかりにくい。

この学校で養成する専門は、前掲の『ハバロフスク市の高等教育施設、テクニクム、ペーテーウー』から直訳調に紹介すると、つぎのとおりである。

- 1 生産企業や設備の電気装備
- 2 工業用建設材料の機械と装備
- 3 窯業技術
- 4 建設材料生産事業の計画
- 5 商品学及び材料技術的な供給・販売
- 6 建設材料工学におけるオートメーション装置の操業。

ここでいう専門は、おそらくわが国の学校の学科にあたるようにおもわれる。しかしみられる如く、このような専門学科は、わが国には大学にも高専にもみられない。私は参観当日に、「わが国の生産機械工学部の印象がある」と考えた。しかし、改めてこのように訳出してみると、「建設材料工学テクニクム」とでもいうべき学校とおもわれる。

なおこの工業テクニクムを設置していた官庁は、私の手元にある『ソ連邦の中等専門学校入学便覧 1987年版』——つまりソ連邦時代のもの——によると、ソ連邦建設材料省であった。ことしの2月からロシア連邦の建設材料工業省に所管が変わった由。

校長は、このテクニクムで養成している6種の専門を、上に紹介した資料の記述と違って、下にしめすように、チェフニク・メハーニキというようにもっと簡単なことばで表現していた。ここで、通訳のミーシャは、チェフニクをどう訳すかで困惑していた。チェフニクはラボーチャー＝労働者でもインジュニェール＝技師でもなく、その中間に位置するものだから、日本人に意味を正確に伝えることばが見つけれない、と彼は正直に言っていた（なお、この点については P. 8 の補注参照）。

- 1 機械のチェフニク（上述の②）
- 2 電気の “ （上述の①）
- 3 電気機械の “ （上述の⑥）
- 4 テフノロジーの “ （上述の③）
- 5 商品学の “ （上述の⑤）
- 6 経営学の “ （上述の④）

( ) 内は、私がつけくわえた推定である。とくにわかりにくかったのは4で、校長は改めて窯業技術のチェフニクだと説明してくれた。

今後は、マイクロエレクトロニクスの専門の養成を拡充したいとおもっている、そういう専門の需要の動向を研究しているところだ、と校長はつけくわえた。

このテクニクムの在学者は、昼間課程に750名、通信制課程に350名である\*。このテクニクムの修業年限を、校長は、昼間課程は3年10か月、通信制課程は2年10か月と説明した。(これはことば通りに受けとると誤解を生ずるおそれがある。ロシアの学年は9月始期制をとっており、翌年6月末におわる。日本(語)の感覚では4か年あるいは3か年と表現するところを、彼は在学期間を正確に表現していたわけである。)

\*この学校では、学生の性別内訳を聞きそこなった。この学校でもらったロシア語・英語の『学校概要』というパンフレットには、「全日制の学生は670名で、その半数は女子である。学生の30%は農村地域からの若者である。通信制課程には約1,000名が学んでいる。」とある。何年度の数字か不明である。通信制の学生数は校長が言った数よりずっと少ない。通信制課程の縮小は、私たちの訪問時にはすでに始まっていたのであろう。

9学年を修了してきた学生が75%、11年制を卒業してきた学生が25%である\*、と校長は説明した。

\*上述の如く通信制課程の修業年限が全日制課程のそれより短いのは、通信制課程は11年制卒業者が入学する課程だからであるとおもわれる。とすればこの%は正確な数値ではなく、概数なのではなかろうか。

なお1992年9月の新学期から、通信制課程の人数を減らす予定の由。昼間部の学生の費用は中央からくるので問題はないけれども、通信制課程については、直接に企業と契約を結ぶ者だけ(つまり費用を負担する企業からだけ)受け入れるので、減ることになるというのであった。

そのことをどう考えるかと尋ねたのに対して校長は、このテクニカムだけではなく国全体の問題であり、以前は必要だったがいまは必要性がなくなりつつあるのだと答えた。これについては、同席していた女性教師からすかさず反対の声があがった。そんなことをすれば国民の教育水準が下がってしまう、国家の政治のやり方がいけないのだ、というのであった。これに対して校長は、要はお金が足りないのだと弁解していた。

学校には、36の教室、35の実験室、350人を収容できる2棟の寄宿舎がある。

校内見学の前に、短時間、学校の案内と称するビデオが見せられた。私たちにロシア語がよく理解できないためでもあろうが、学校案内用のビデオとしては、編集は上手ではないように見うけられた。

校内の実験室は、説明用の各種の展示物、材料や製品の見本やその模型など、どの部屋もよく整備されている印象を受けた。日本であったら、企業の見学者用の部屋か科学博物館でしか見られないような、大型装置の動態模型もいくつか見せられた。これが予算不足で悩む学校の実験室かと疑いたくなる程だったけれども、経済がこんな事態になるまえに作られたものなのであろう。

最近になって教育内容が最も変わったのは社会科学系の科目で、専門科目にはそうした事態はないということだった。

実験室の装備の水準が高いように見うけられたので、見学後の質疑のさい、教師の引き抜きとい

う事態がないのか尋ねてみた。「引き抜き」ということばは分かりにくかったらしいけれども、最近1か月以内に電気関係の専門科目の教師が3人他へ転出したという。教師の在職年数は15～20年で、昨年1年間には転出はなかったというから、ごく最近の事象らしい。いずれも、より高い賃金の職場へ変わっていったという\*。学年途中でのことだけれども、まだ空席は補充されていないとのこと。

\*教師たちは（あるいは一般の労働者もそうなのかも知れない）、転出を希望してから2か月たつとやめることができる由であった。

ついでに教師の性別構成を尋ねたところ、全員46名中男性は16名で、専門教育科目担当者にも女性教師がいる由。校長は、男性教師が少な過ぎるとおもっているけれども、ここの賃金は男性にとつては安いので、賃金のよい方に行ってしまうのだと言っていた。

卒業生の就職先についても尋ねた。約70%は学んだ専門の方面に行く、しかし約30%は卒業後すぐに2年間の兵役に入ってしまう、そういう者たちは除隊後に違う方面に行く者が多いとのことであった。平和憲法のもとに育ってきた私たちは、幸いなことに兵役のことを忘れていた。しかし、他の学校で卒業・就職・進学と兵役との関係を調べなかったのは、やはりうかつであった。

質疑のさいごにテフニクムの校長の方から、日本の中等専門学校では卒業生はどのような専門を受けとるのかという質問があった。日本では専門（スペツィアリノスチ）を与えるという制度はないことなどを説明しても、理解しかねていた。「専門」に限らず、日本の学校制度や職業慣行についての知識がロシア人には全く欠けていることを改めて知った次第であった。考えてみれば、それは、私たちがロシアにおける労働者（ラボーチャー）の熟練等級（ラズリャード）や各種の学校が授与する「専門」とそれが現実に機能するさまを全く知らないことと同じである。

こうした応答があった故か、この学校では、校長のみならず同席していた女性教師からも、日本の教師たちと交流したい旨の希望がのべられた。

### 13 ユニバーシテイの性格をもつハバロフスク教育大学

今回は、高等教育施設としては、鉄道大学のほかに、ハバロフスク教育大学を訪問した。技教研のロシアの教育事情視察団が教育大学を訪問したのはこれが初めてなので、ややくわしく紹介しておく。

旧ソ連邦には、『高等教育入学便覧 1991年版』——ソ連全体の高等教育施設を総覧し得る最後の『便覧』——によると、高等教育施設（ブースと略称し、わが国ではふつう大学と訳されている）は895校あり、このうち188校（21.0%）が教育大学であった（このほかに、外国語教育大学が12校あった\*）。

\*『ソ連邦の国民経済 1990年版』（1991年）——ソ連邦として最後かも知れない統計書——によると、1990/'91年度のソ連の高等教育施設は911で、その学生数は516万6千名であった。

その内訳は、全日制305万5千、夜間課程46万5千、通信制164万2千である。従来から、通信

制や夜間課程の学生の多いことはソ連の高等教育の特質の一つとなっていた。ちなみにいえば、日本の公式統計は、通信制の学生の数を大学生数に数えていない。

ソ連の高等教育施設は、大学（ユニベルシテート、わが国では総合大学と訳して区別している）と単科大学（原語はインスティトゥートで、専門大学とも訳されている）に区分される。前者は、90/91年度には71校あった。教育大学は単科大学の1種であり、90/91年度には198校あり、99万4千名の学生が学んでいたとされる。学校数が前記の『入学便覧』と若干異なっているけれども、理由は不明である。

ハバロフスク教育大学は、物理・数学学部、生物・化学学部、歴史学部、美術学部、外国語学部、ロシア語・ロシア文学学部、体育学部を置き、普通学校上級学年（日本流に言えば中等教育）の教師養成を主とする大学である。外国語学部で教えている外国語は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語であり、将来朝鮮語も教える計画であるという。ごく最近、日本語のコースも開設された。

それぞれの学部は大学院課程（アスピラントウーラ）があり、最近、（いくつかの学部には）カンディーダートナウク（日本でいえば博士課程か）もできたという。副学長のバリツキー氏によると、このハバロフスク教育大学はインスティトゥートといっているけれども、日本やアメリカの大学（ユニバーシティ）の性格をもっている由。実際、学部構成や大学院コースがあることなどから見て、そういってもおかしくないようにおもわれる\*。

\*ちなみに総合大学（ユニベルシテート）とは、「科学的知識の基礎を構成する学科を総合することを教える高等教育施設。国民経済の諸部門や科学、文化の専門家を養成し、科学研究を遂行する」と説明されている（『ソビエト百科事典』）。他方単科大学（インスティトゥート）は、「国民経済の諸部門や文化、保健（工学、エネルギー工学、教育学、医学、法学など）を4～6年で教える高等教育施設の名称」とされる（同上）。共通点があるけれども、前者は科学の基礎を教えることを重視し、同時に研究機能をもつ点が強調されている。

学生総数は約4,000名、うち昼間課程の学生は約2,500名で、残りは夜間及び通信教育課程に在籍している。遠隔地の学生は通信教育が基本となるが、ハバロフスク市内の者は夜間に通学することもできるからである。ロシアの大学はすべて5年制（夜間課程と通信教育課程および医学部だけが6年制）と思い込んでいたけれども、ハバロフスク教育大学では4年制と5年制とがある由であった。どういう場合に4年制と5年制の違いとなるのかは、聞きそこねた\*。

\*この学校でもらった『ハバロフスク教育大学概要』によると、外国語学部には、1外国語のみを専修する4年コースと、2外国語を学ぶ5年コースとがある、とある。他の学部には4年コースがあるのかどうかは不明。帰国後に福田誠治氏が教示して下さったところによると、教育大学で理科の免許を取得する場合1科目だけなら4年、複数科目なら5年というケースもある由であった。

なお、同大学の『大学概要』によると、ティーチング・スタッフは391名である。学生数や教員数からみたこの大学の規模は、わが国の東京学芸大学に相当する、と田中喜美氏は言っていた。

カリキュラムの構成は、歴史学部を例にとると、教育学約20%、社会科学約30%、残りの50%が専門とのことであった。教育実習は、第1～3学年では、子どもに馴れ親しませる目的で年に1～2週間、第4、5学年は、主として農村の学校で年に1.5～2か月の本格的な実習を課する由であった。

卒業生のすべてが教師になるわけではない。教師になる者の割合は学部によって異なり、最近までは、外国語学部30%、歴史学部50%、生物-化学学部60%、美術学部10～12%という状況だったという。教師以外の就職先は、政府機関、共産党、企業などで、美術学部では美術家となる者が多かったらしい。ただし、ペレストロイカ以前は、大学が就職の世話をし、就職したら3年間はそこに働く義務があったけれども、今後はどうなるかわからないという。

目下のところ受験生のこの大学への人気は高く、成績は平均4以上でないと入れない。外国語学部などは12倍もの競争率になるという\*。ちなみに、ロシアの成績評定は、いわゆる絶対評価で1～5でつけられる。教師の給与はむしろ低いのに人気が高いのは何故かという質問(横山氏)に答えて、がんらい教師は女性の職業として人気が高いこと、教職以外への道が開けていること、夜間・通信教育課程については働きながら学べること、などの事情があげられた。

\*横山悦生氏らが訪問した医師夫妻の家庭では、医科大学入学の競争率は3.5倍くらいだという話題がでている。どの水準の生徒が希望するかという問題もあるので一概にはいえないけれども、少なくともいまのところ、医科大学は特別に人気のある大学ではないらしい。同医師夫妻は、自分の子どもが医者にならないことを望んでいた。

最近の最も重要な問題は、予算不足だという。日本語などの外国語の課程や労働科の教師養成を拡充したいとおもっても施設が不足するというような問題だけでなく、目下4月以降の予算がきていないので4月以降の予算がたたず困っている、と言っていた(私たちが訪問したのは4月1日だった)。予算不足を補うために、たとえば定員100名のところを120名とし、20名分については企業から金を出してもらおうというようなことをしている。こういう方式で昨年は2万ルーブルの収益を得たという(このしくみの具体的なことはよくわからなかった)。

現在は学生の授業料は無償だけれども、近く改正される法令で有償となるのはほぼ確実であろう、とバリッキー氏はのべていた。

ハバロフスク教育大学で教育する専門は、『高等教育入学便覧 1991年版』によると、表の如くであった。はじめの番号は、専門の名称の番号、次に掲げられているのが専門、(全)は全日制、(通)は通信制をしめす。この『入学便覧』が発行された時には、まだ日本語コースは開設されていなかったわけである。

表 ハバロフスク教育大学で養成する専門

0101	数 学 (全) (物理)
0104	物理学 (全)

- 0109 生物学（全）（化学）
- 0207 歴史学（全、通）
- 0217 ロシア語と文学（全）
- 0220 外国語（全）（英語とドイツ語、ドイツ語と英語、フランス語とドイツ語、中国語と英語）
- 0303 体育（全、通）
- 0304 初歩の軍事教練と体育（全）
- 0306 製図と造形芸術（全）
- 0309 教育学と教育労働の方法論（通）
- 0310 欠陥学（全、通）〔注：障害児教育学をいう〕

ハバロフスク教育大学では、労働教授の教師や初等学年の教師養成は行っていない。労働教授の教師は、このハバロフスクの近くでは（といっても、約400km離れている）コルソモールスカ・ナ・アムール教育大学で養成されている。ちなみにいえば、このコムソモールスカ・ナ・アムール教育大学はハバロフスク州では二番目に大きい都市にあり、前掲の『入学便覧』によると全寮制で、数学（全）、物理学（全）、生物学（全）、地理学（全、通）、歴史学（全）、ロシア語と文学（全、通）、労働科（全、通）、教育学と心理学（全、通）、教育学と初等教育の方法論（全、通）という専門を教育している。

なお、私たちは訪問しなかったけれども、ハバロフスクには教育専門学校があり（1校）、初等学年の教師はここで養成されている。教育専門学校は中等専門学校の一つで、ふつうは、テフニクムと同様に9学年修了者を入学させる修業年限4年の学校である。前掲の『ハバロフスク市の高等教育施設、テフニクム、ペーテーウー』によると、同市の教育専門学校が養成している専門は、初等学年の教師、就学前施設の保育者、普通学校のための唱歌と音楽の教師、幼稚園のための音楽労働者、である。

#### 14 ハバロフスク鉄道大学

この大学は1982年にも訪問している。得られた情報は、前回の報告（『技術教育研究』第22号、1982年8月）と重なっている部が多いので、ここでは、学部の構成だけを紹介しておく。

この鉄道大学に設置されている学部は、今回渡された印刷物によりロシア語からやや直訳調に訳すと、次の通りである。

- ① 機械学部
- ② 鉄道営業学部
- ③ 道線路建設学部
- ④ 工業用・民間用建設学部

- ⑤ 電気機械学部
- ⑥ オートメーション・遠隔操作・通信学部
- ⑦ 高等教育機関への予備学部
- ⑧ 本務をやめずに技師を養成する学部
- ⑨ 労働者の資格、鉄道従業員の専門資格の昇進のための学部

これを前回訪問の報告とくらべると、①～⑥は以前と同じで、専門別学部の一つであった「橋梁及びトンネル学部」がなくなっている。前回の報告で「進学準備課程部」と訳されていたものが⑦で、⑧は通信教育学部、⑨は再教育学部にあたるものであろう。

現在の学生数は8,000名、うち昼間課程4,000名、通信教育課程4,000名である。40%は女性。修業年限は5年、通信制課程は6年である。教員は520名の由。2600名を収容できる寄宿舎をもっている。

質問に答えて、いまの入学者選抜は、昼間部は平均2.5倍くらい、通信制課程は入試がなく企業が派遣してくる学生である。

この大学はロシア連邦国高等教育省と鉄道省の共同の所管で、予算は両方からもらっている由。カリキュラムは前者が、養成すべき専門の人数等は後者が決めるという。

#### 学校の資格の判定、廃校

私たちは鉄道テフニクムの校長から、近いうちにハバロフスク市内のテフニクムでは倒産する学校が続出して、5年以内に半分になってしまうかも知れない、という衝撃的なことばを聞いた。また鉄道大学では、近いうちに資格委員会ができることになっているという話を聞いた。いずれの場合もそれ以上くわしい説明がなかったから、公立の学校がなぜ倒産するのか、資格委員会とはどのような役割をもっているのかなど、不明のままに帰国してしまった。

帰国してから、資格委員会とは各種の教育機関に対する審査機関をさすことがわかった。すなわち、ソ連邦国民教育国家委員会は、1990年6月14日付の同委員会命令として、各教育機関における教育の質に対する国家一社会的コントロールを改善することを目的として、初等中等普通教育学校、職業技術学校、中等専門学校および大学の審査のための暫定規程を定めていたのである。そのなかに資格委員会などの事項が規定されている。(前掲『海外教育ニュース第11集』、270-274頁、以下はこの資料からの要約である。)

「中等専門学校の審査に関する暫定規程」によると、その概要は次の如くである。すなわち、この審査は各学校を直接直轄する行政機関が組織した審査委員会により、通常5年に1回行なわれる。審査は、卒業試験および卒業論文(制作)等の審査、審査委員会が行なう筆記試験、学校側が提出するデータなどにより、20日以内に行なわれる。

資格審査委員会は、詳細な報告と、「資格あり」、「資格なし」あるいは「第一次審査終了(要再審査)」の3段階の評価を付した審査結果を当該学校を所轄する行政機関に提出する。

審査結果が承認されると、「資格あり」と判定された学校については、所轄の行政機関により、物質的・精神的に奨励され、学校の裁量権を拡大する方策が検討される。

「資格なし」と判定された場合には、その原因が詳細に分析され、「問題点の解決策を講じ、3か月以内に一定の手続きに従い、学校を再組織ないし専攻変え、あるいは廃校することを勧告する」とされている。

鉄道テフニクムの校長がハバロフスク市内では倒産するテフニクムが続出するだろうといったのは、たんに財政的な破綻だけでなく、この資格審査を想定していたのかも知れない。

「高等教育機関の審査に関する暫定規程」によると、大学に対する審査では、①教育活動、研究活動をふくむ大学のあらゆる方面における活動の審査、②物質・技術的な面の審査、③大学の附属設備の審査が総合的に実施される。審査の結果には、「資格あり」、「資格なし」あるいは「第一審査終了（要再審査）」の判定が与えられる。

「資格あり」と判定された場合は、大学のランク付けが行なわれ、人事・財政面での自治権が付与される。「資格なし」と判定された場合、3か月以内の廃校、再編あるいは「資格あり」と判定された同一共和国内の同じ専攻分野を持つ大学への統合を決定しなければならない、とされている。

以上略述した「暫定規程」は、過渡期なので不明な点が多いけれども、鉄道大学の学長の話から推察して、ソ連解体後のロシア連邦にほぼそのまま継承されているのかも知れない。

## 15 細分化された専門、資格、就職

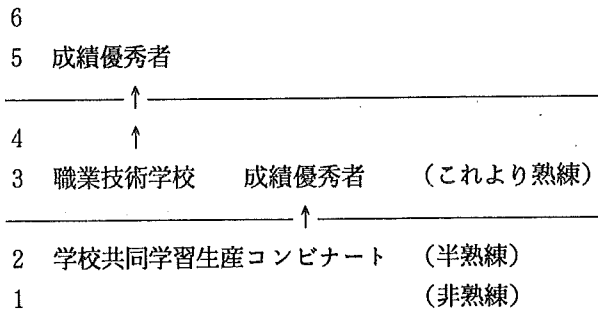
ロシアの職業教育は、中等職業技術学校（エス・ペーテウー）、中等専門学校（テフニクム）、大学のいずれをみても、教育組織が日本語では職種ともいうべき専門（原語はスペツィアリノスチ、通訳は専門と訳していた）ごとに細分化されている。養成目的の区分としての単位を表わす用語としての専門（スペツィアリノスチ）という概念は、ペーテウーだけではなく、テフニクム、大学にも用いられていて、私たちには分かりにくい。1982年にハバロフスクを訪問した当時、この問題を調査した森下一期氏によると、ソ連のペーテウーで養成される職種は約1400種にのぼっていた（森下一期「職業技術学校とその教育内容」『技術教育研究』第22号、1982年8月、41頁）。

中等職業技術学校では、卒業時の成績によって、当該の職種についての格付け（ラズリャード）が与えられる。労働者がもらう資格（クバリフィカーツィア）は、たんに学習した職種や専門（スペツィアリノスチ）だけで決まるのではなく、その技能の熟練度の資格等級（ラズリャード）によって決められる。この等級は1級（不熟練）から6級（高度の熟練資格）まで区分される\*。

\* 福田誠治氏が資格等級（ラズリャード）と学校教育の関係を図解しているので紹介しておく（福田誠治『ペレストロイカにみる教育改革・教育の再編』1990年、ぎょうせい、214頁）。なお、この書物には、教育と職業資格との関係がくわしくのべられている。私（たち）がこの書物を事前に読んでいかなかったことは失敗だった。



### 資格等級の養成



今回ハバロフスクの書店でもとめたア.ヤ.ナインの『青年労働者の職業養成の運営』(1991)には、ソ連の労働者の熟練度別構成比が掲げられている。構成比の母数の実態を読みとれない難点があるけれども、参考までに紹介しておく。

表 労働者階級の熟練度別構成比 (%)

熟 練 度	1970	1975	1980	1990
高度の熟練 (5～6級)	19.3	22.5	23.2	25.6
熟 練 (3～4級)	46.5	59.2	60.4	63.3
低度の熟練 (2級)	25.3	15.8	14.5	10.4
不 熟 練 (1級)	8.9	2.5	1.9	0.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0

技術の進歩に見あうように青年労働者の資格を高めることが職業教育政策の課題であり、近年少しづつ高い資格の労働者の比重が高まっているのは成果であるけれども、もっと高める必要がある、とのべられている。わが国であれば熟練度の向上とか技能の向上というところを、資格(クバリフィカーツィア)の向上と称するわけである。

横山氏が第30番ペーテウーで少し尋ねていたけれども、資格の等級の基準、判定、授与の手順、資格(の等級)と賃金(査定)との関係などについては、くわしく質する機会を逃してしまったのは残念だった\*。考えてみればかねて疑問におもっていたことだから、これは今回の私の失態の一つであった。

\* 前述のように、教育-生産コンビナート(ウーペーカー)では、試験は、工場から専門家が来て試験をすると説明されていた。職業技術学校(ペーテウー)での学習が資格授与の基礎となっていることはわかっている(たとえば『技術教育研究』第22号、37、45頁参照)。

テフニクムや大学で教育する分化の単位も専門(スペツィアリノスチ)と呼ばれている。テフニクム卒業者に与えられるディプローマには等級はない(『技術教育研究』第18号、7頁)。

反対に、わが国の工業高校の生徒は卒業に際して特定のスペツィアリノスチをもらわない、そういう制度がない、ということ、ロシア人には理解できないようであった。

ロシアのテフニクムや大学の設立主体は、施設ごとに異なっている。総合大学（ユニヴルシチェート）のように教育省がつくっている大学、教育大学のように各共和国高等教育省がつくっている大学はまだわかりやすいけれども、鉄道大学の設立主体は鉄道省であり、ハバロフスク工業テフニクムは建設材料省が設立しているというような事情は私たちにはわかりにくい。少なくともソ連時代には、工業に関する限り企業はすべて国営だったのだから、民間企業の存在を前提としている日本とは省の存在意味が違っているからに違いない。そして、各学校が養成する職種（専門）の分化は、どこかで全体的な統括をしているにしても、基本的にはその設立主体の要求にしばられているのかも知れない。

ところで、この細分化された養成職種と就職先との関連性は気にかかることのひとつであった。鉄道テフニクムで尋ねたところ、70%くらいは学んだ専門に関連した職場に就職する。鉄道関係の賃金もあがっているので何とかこれ位に押さえているけれども30%くらいは直接には関係のない職場に入るとのことであった。最近、むしろ成績がよく気のきいた学生程、専門に関係のない方面に行く、ともいわれた。全ての者が学んだ専門に関連した方面に就職するわけではないという事情はわが国と似ているわけで、そうだとすると、教育システムを細分化していることに対する疑問は禁じ得ない。

## 16 きれいな調度品、ゆきとどいた展示、コンピュータ

どの学校でも、校長室をはじめ各教室の机・椅子は大い合板をふくむ木製品であった。要部に金属材料を使ったものもある。木製品だけれども、どれもしっかりしていて、いわゆるガタがないし、きれいだ。私たちの仲間の1人は、木製品は暖か味があっていいな、と言っていた。あとで気づいたのだが、わが国でいう職員室（教員室）を見せてもらわなかったのは失敗だった。

実験室・実習室や物理、化学など各教科ごとの教室の実物や模型等をふくむ展示物は、いずれもよく工夫され、整理されていた。念のためいえば、私たち参観者のためににわかにならされたものではなかった。実験装置にも装置模型をふくめて工夫をこらしたものが多かった。どの学校もそうであったところをみると、これは、ロシアの技術教育に定着している教育方法概念の現われなのかも知れない。

いくつかの学校に設けられていた常設展示室にも、感心した。第3番中学校の「民芸品の展示室」（という表示のついた部屋）や電気通信テフニクムの技術史の展示室など、いずれもわが国にはないというだけではなく、展示の内容も充実していたからである（私たち訪問者のためににわかにならされたものとはおもえなかった）。もっとも、第12番中学校で見た生徒の作品の展示には、「学校市場——製品の見本」という説明がつけられていた。作品をつくることにもいわゆる市場経済の考え方と結びつける企図がこめられているのだ。私たちはこの学校で、生徒の作品（手芸品）をおみやげにちょ

うだいたした。私がいただいた鶏をかたどったティーポットカバーには、10ルーブルの値札がついていた。

パソコンをふくめて、コンピュータを導入しようとしている熱意は感じられた。パソコンのディスプレイ、キーボードなどのつくりは、わが国などに見られるスマートなものではなかった。いわゆるコムの制約で、資本主義国との技術交流が妨げられてきたことが、こんなところに現われているのであろう。さわってみた仲間もいたから、その水準は専門家に聞いてみたいところである。使用しているコンピュータ言語は、ペーテウーではBASIC、テフニクムや大学では、フォートラン、パスカル、C言語などであった。世界共通といえるけれども、別の見方をすれば、ロシアで開発されたものはないらしい、ともいえる。

## 17 財政難と教育事情の変化、生徒の実習の賃金

私たちの訪問した多くの学校では、ペレストロイカ政策がとられてから、さまざまな側面に変化が起こっていた。変化をひき起こしている要因は、前述のリツェイ創設や日本語コース開設に見られる新しい動向もあったけれども、大ていの場合には財政事情から説明された。

もっとも、私たちが訪問した第12番中学校が午前・午後の2部制を実施していたところをみると、財政難は最近にわかには始まったものではないらしい。

実習用の工具、工作機械、電気計器類は、種類そのものはわが国のそれと同様なものであったけれども、いずれもいわば年代物だった。こうしたものの更新がおくれているあたりに、現代ロシアの経済困難が反映しているのであろう。

「近い将来、市内のテフニクム（17校）の半分は倒産するだろう」という鉄道テフニクムの校長の衝撃的なことばもあった。（あとでわかったことだけれども、少なくとも1987年頃までハバロフスクにあったテフニクムは18校で、その後ハバロフスク文化・啓蒙学校がなくなっていた。）この校長のいうように、生徒に対する企業からの需要のない学校がつぶれることは、ありそうにおもえた。

私たちが訪問した第30番職業技術学校（造船ペーテウー）では、実習工場のうちの木工場を企業に貸していた。そこでは企業の労働者がしごとをしており、中間製品らしい品物が積みあげられていた。この学校は海軍の造船工場と隣接している（生産実習はその工場で行われる）というのに、実習工場の旋盤は60年代の物で、いわゆるガタ旋であり、設備更新のおくれていることがうかがわれた。中等職業技術学校では製図の授業も見せてもらったけれども、ドラフタを使っている様子はなかった。

教育－生産コンビナートでは、校長が「独立採算」ということを強調していた。中学校生徒の実習収益で教職員の給与や施設設備をまかなえる筈がないとおもわれたので念のために確かめてみると、収益のあがる作業を重視しなくてはならない、という意味らしかった。生徒の実習からあがる収入を設備更新の費用としてあてにするという事態は、かなり深刻だといわざるを得ない。

有能な技術系教員の移動（引き抜き？）も始まっている。エレクトロニクス関係をふくむ実験施設に比較的新しいものが多く見られた工業テクニウムでは、今年に入って既に3人の教師が転出した。企業の方が給料が高いからだという。他の学校にも起こっているのかも知れない。

なお、教育-生産コンビナートやペーテウーの生徒の実習に対して賃金を支払うという方式は、最近になって始まったことではなく、以前からそうだった（たとえば、長谷川雅康、前掲誌、37頁、森下一期、前掲誌、46頁）。誤解のないようにこのことをつけくわえておく。前回訪問時と違うのは、校長たちがこのことを強調するようになったことである。少なくとも私の印象としてはそうだった。生徒たち、その親たちが実習賃金をあてにするようになったという事情が背景にあるからであろう。

田中喜美氏らが訪問したある市民の家では、近い将来授業料をとる私立学校ができるらしいという話が出たという。懇談の席で教育行政当局者に確かめてみたけれども、はっきりした答はなかった。しかし、幼稚園や第3番中学校で聞いたように、教育に関する親たちの経済負担は確実にふえている。ハバロフスク教育大学のバリツキー氏がいていたように大学が有償ということになると、ロシアの教育の社会主義的性格は経済負担の面からも変わってくることになる。

財政難に関していえば、空港からハバロフスク市の中心街に向かう途中の左側にある日本人墓地の管理は、最近の財政難のために市の手から露日協会の手に移されたとのことであった。

## 18 自由化の波、グラスノスチ

経済活動だけでなく、教育活動をふくむさまざまな側面で、自由化、グラスノスチ（公開性）の波は確実に広がっているように感じられた。たとえば私たちが訪問した鉄道区（行政区の名称）にある教育-生産コンビナートは、軍需工場に接近しているために従来は外国人の立ち入りが禁止されていた由で、外国人としての訪問者は多分私たちが初めてであろうといわれた。同様に、私たちが訪問した第30番職業技術学校も海軍の造船工場に近接しているため、従来は外国人の立ち入りはできなかった学校の由であった。

教師たちの間に自由の空気が広がっていることも感じられた。工業テクニウムで懇談した際、近い将来夜間課程や通信教育課程は縮小ないし廃止されるだろうと校長がのべたので、そのことをどう考えているか私が尋ねたところ、企業の要求がなければそうなるのは当然だといわんばかりの回答があった。これにたいしてすかさず、同席していた女教師から、夜間課程や通信教育課程を縮小したり廃止したりすることは国民の教育水準を低めることになり反対だという声があがった。外国の訪問者を前にしてのことだから、規律がゆるんでいるというより、教師たちが自由に発言するようになったとみてよいのではなからうか。

中等以上の学校で、ペレストロイカ以後、とくに昨年の政変以後最も大きな影響を受けたのは「歴史学」の授業だった、と多くの校長が語っていた。第30番ペーテウーの歴史の教師は毎週のように自主的に集まって新しい教材を研究したり、昨年レニングラードで開かれた研究会に出かけ

て勉強したりしているとのことであった。ところで、第7番ペーテウー（電気モンタージュ）の歴史学の教室では、校長は、この先生は元共産党員で、いまも社会主義のことをきちんと教えており、社会主義がいいか悪いか、正しいかどうかは生徒が判断すればよいといっている、と紹介していた。

第3番中学校で、日本語を教えるコースを開設していたことは前述した。日本語教育をわが国の小学校第1学年にあたる学年から始めるところがわが国とは違っている。親の要望で開設したといわれたけれども、こういうコースを開設する権限がどこにあるのかは聞きそびれた。

10年前に訪問したときは、地方新聞の国外持出しは禁止されていた。私たちがハバロフスクを訪れたことを報じている新聞を河野義顕氏が見つけたのに、持ち帰ることができなかったことを憶えている。いまは、この種の禁令はないそうである。

### 19 レーニン像健在——街の表情

ロシア連邦の各地では、レニングラードがサンクト・ペテルブルグとなった如く、街の名称が変わったことなどが伝えられている。しかしハバロフスクでは、カール・マルクス通り、レーニン通り、レーニン広場などの名称に変更はなく、レーニン広場のレーニン像も健在だった。街の名称だけでなく、鉄道大学の講堂に描かれたレーニンの肖像も健在だった。これについての学長のことばは、「私たちは偉大な人だと思っていますから、消すつもりはありません」というものだった。同大学の別の教室の壁に大書された「学べ、学べ、そして学べ」というレーニンのことばも、10年前に訪問したときのままであった。このことばとレーニンの肖像は、鉄道テフニクムの教室にもあった。第3中学校の校長室にも、レーニンの肖像が掲げられていた。ついでにいうと、第7番ペーテウーのある教室の壁には、マルクス、エンゲルス、レーニンの3人の肖像が掲げられていた。

街の書店に入ると、マルクス・エンゲルスの棚も、レーニンの棚も変わった様子はなかった。ある書店では、レーニンの肖像画の隣にスターリンの肖像画も並べて売られていた。書店についていうと、売り場面積は結構広いのに、どの棚にも並べられた本は同じものが多く種類が少ない。ロシア（旧ソ連）の出版点数はかなり多いから\*、流通機構に私たちにはわからない点があるのかも知れない。

\*私たちは日本では、通常、ナウカ書店が毎月届けてくれる『新刊書』（ノービー・クニーギ）という目録——実際は刊行予定書目録——をみて注文する。その刊行点数は、資本主義国のそれに比べても決して少なくはない。統計によると、1990年にロシア連邦で発行された書籍とパンフレットは約4万1千点で、その発行部数は15億5310万部であった（ゴルバチョフのペレストロイカが始められる前年の1985年には5万1千点、17億2500万部だったから、ペレストロイカ以後近年減少しているわけである）。

同じ本がたくさん並べられているといったけれども、反対に1冊か2冊しかないものもある。「子どもの本」という看板を掲げた書店に入ったときのことだ。同行した村田豊美氏がグリム童

話のロ訳版の絵本を買った。1冊175ルーブルくらいだった。珍しく多色刷りで日本の絵本の装丁とかかわらぬくらいの本だった。私を買った『ソ連邦の経済・1990年版』という750頁の書物は9ルーブルだったからひどく高い。しかし、私は1000円を両替したルーブルの用途がなくて持てあましていたところだったので、翌日同じ書店に行ったらそのグリム童話の絵本はもうなかった。同じような装丁の他の絵本をもとめたところ、150ルーブルくらいだったと記憶する。

ハバロフスクのメインストリートであるカールマルクス通りに見る限り、10年前との大きな変化は、「さっぽろ」という日ロ合弁の外貨専用レストランや「協同組合店」というま新しい看板を掲げた店ができたこと、街頭でバッジを売りつけようとする子どもがいること、などであろうか。ロシア人の好きなアイスクリームを売る店が出るとたちまち長い行列ができるのは、見ていてほほ笑ましくらいだった。パン屋の店頭の人びとの行列の長さが10年前より長いのか短いのかは、わからなかった。食料品は切符制だといってフトールシン氏はご自身の切符を見せて下さったけれども、その仕組みはよくわからなかった。レーニン通りまで足をのばすと、「にいがた」という日ロ合弁のレストランもあった。ここに入ってみた。純日本風のカラオケもある。ここはルーブルでも支払いできる。

食料品店や3階建ての百貨店ものぞいてみた。買うものを決めてからカツサ（レジスター）で現金を支払い、そこでもらった紙切れを渡して品物を受けとるという非能率な購入方式は、むかしのままだった。一行中の佐々木英一氏らが行ったもう一つの百貨店は値段はいくらか高いようだけでも品数は多かったという。店舗の種別化がすすんでいるのかも知れない。

ある書店では、おつり（こまかいお金）がないといわれた。カツサをのぞいてみたら、実際、補助貨幣はからだった。

なお、10年前に訪れた時にはどの店でも使っていた大きなロシア式そろばんを、今回はほとんど見かけず、たいていはポケコンが使われていた。たまたまホテルの売店で見かけたロシア式そろばんを衣川洋一氏が買いたいというので、百貨店などに行って探してみたけれども売っていない。何百年にもわたってロシア人に親しまれてきたあのそろばんも、まもなく博物館入りするのかも知れない。

表通りに面したアパートの1階には、大い食料品店などの店がある。「時計修理」という看板も目についた。ある百貨店の一隅では、実際に、昔なつかしいゼンマイ仕掛けの懐中時計を修理していた。「時計修理」店は、私たちが何回か歩いたカール・マルクス通りにもあったけれども、ドアが閉まっていて、営業しているかどうかわからなかった。

街には、日本製の自動車もかなり見かけた。横腹に漢字で「網干自動車教習所」と書かれた車も走っていた。中古車である。私たちの市民宅訪問の際にインツーリストが提供してくれた車は、トヨタのライトバンの新車であった。

私たちは、視察の目的地への往復にはすべてイントゥーリストのバスを利用した。これは能率的であったに違いないが、街の表情をこまかく見ておきたいという気持ちを大きく制約し、興味ある

情景も車窓からかきまるとどめざるを得なかったのは残念だった。たとえば、日曜日の朝、ハバロフの銅像のあるハバロフスク駅前に行く途中で、私は、小さな教会の建物に多勢の人が出入りしているのを見た。年輩の人が多く見えたけれども、なかには若い人の姿もあった。

「ピオネールの家」という看板のある小さな民家のような建物もあった。私たち技教研の視察団は、12年前の1980年にレニングラードでピオネール宮殿を視察したことがある。書物を通しての紹介やその時の印象から、私たちは、ピオネール宮殿は、小さな子どもの各種のサークルの活動の場としての豪華な施設という先入観念ができていた。後刻、名古屋大学に留学しているロシア人のイーゴリ氏の話から、「ピオネール宮殿」という大きな施設はレニングラード市に2つというように、大都市に1つか2つしかないのであって、大ていは、各地域に小規模な「ピオネールの家」という施設が設置されていることを初めて知った。

街を歩いたりバスの車窓から眺めていて気づいたことの1つは、10年前には中央区の区域にさえ少なくなかった古い木造平屋の民家の数が、中央区の区域では急速に減ったことだった。古い木造民家の軒下には、鋸の歯形のような模様を刻んだ板がぐるりとはめ込まれている。どの家のもも同じように見えるその模様は、じつはその住民の出身民族ごとに少しずつ違っていると聞いていた。古い家屋がなくなるとともに、あの模様も記憶や習慣から消えてしまったのだろうか、などとおもったものである。ただし、工業区にある第30番ペーテウーや第7番ペーテウーに行く途中では、朽ちかけているのではなかろうかとおもわれる木造家屋の集落がまだあちこちに残っていた。道路をはさんだ商業リツエイの向い側に、最近になってペンキを塗り替えたいらしい小ぎれいな木造家屋を見たときは、なぜかほっとした。

建物についてつくわえると、カール・マルクス通りに面した官庁、学校、百貨店、日本流にいう下駄ばきアパートなどのビルや、表通りから裏に入って林立しているアパートは、ほとんどが3～4階建である。それは、サンクト・ペテルブルグ（旧レニングラード）がいわゆる街並保存のために旧市街区域内に高層建築を禁止しているのを憶い出させるくらいである。しかし、レーニン広場に面した旧共産党系の何かの建物が7・8階の高層であるところを見ると、そういう規制はないらしい。旧市街地を離れた空港に向かう途中のアパート群は10階前後の高層であった。いずれも、高層の建物は新しいものであることがわかる。

日曜日にはバザールにも行ってみた。自由市場であるこの店には、街中の商店（ガストロノーム、国営店）にはみられない肉も豊富に並んでいた。ただし値段が高いらしい。多勢の一般の市民が各種の什器、衣類などを売るために屋外にずらりと並んで立っていたことは予想外だった。きれいに洗ってあったけれども、つい数日前まで自分たちが使っていたのではないかとおもわれるものも少なくなかった。商品の質が違うという点でわが国の敗戦直後のいわゆる闇市とは違う。あの敗戦直後の「たけのこ生活」なのだろうかという疑問があたまをかすめ、売物を持って立つ人びとに子どもが多いのがやり切れない気持ちだった。

深層ですすんでいるであろう町の変化を、短期滞在の私たち外国人にわかる筈はない\*。印象と

しては、同じロシアとはいえモスクワからはるかに遠い極東の大都市ハバロフスクの市街も、緩慢であるけれども確実に変化しつつあるように見えた。

\*昨年8月のクーデターの際、ハバロフスク州の共産党はクーデターを支援した数少ない共産党の一つだったという（和田春樹『ロシアの革命-1991』岩波ブックレット№224、1991年、47頁）。昨年8月のクーデター当時のハバロフスクの様子を、私たちは聞いてみる機会がなかった。

## 20 賃金、インフレ、失業

私たちは経済事情の視察に行ったわけではないので、この面で私たちの得た情報がどの位実態を反映しているのかよくわからないけれども、見聞した若干の事項を並べておく。

私たちが尋ねたところでは、教師の賃金は幼稚園で1,000~1,500ルーブル、教育-生産コンビナート1,240ルーブルなどで、他方、横山悦生氏らの訪問した医師（もちろん勤務医）の月収は4,000ルーブル、村田豊美氏らが訪問した技師夫妻の月収は合わせて9,000ルーブルとのことであった。医師や技師の賃金が高いのではなく、教師の賃金が低いということらしい。村田氏らの訪ねた技師宅では、給料は4倍になったけれども物価は10倍になったといていた由。

問題は物価（の上昇）だけれども、激しく上昇しているといっても、品物の種類による差が大きいらしい。食料などの生活必需品の価格上昇が市民生活を痛撃しているらしいけれども、ここで紹介し得るデータがない。月に12ルーブルだった幼稚園の授業料が200ルーブルになったことは前述した。

いまのロシア人にすれば華奢品に属するものの物価上昇はとくに激しいといえよう。横山氏らが訪問した医師は3年前に自動車は1万ルーブル、テレビは3,500ルーブルだったけれども、いまならそれぞれ18万ルーブル、12万ルーブルだろうと言っていたとのこと。（もっともこれは新車のことで、街を走っている日本製の中古車は3万ルーブル位で輸入されているものらしい。)\*

\*外貨で買う商品の物価体系は別らしい。外貨専門のみやげ物店ベリョースカでみると、商品の種類と量は10年前よりはるかに豊富で、15年もののコニャクが11.8ドルで買えた。

10年前に9ルーブルで買いたもめたものとほぼ同じ銅板にセラミックの焼付けをした壁掛けは、18.85ドルだった（価格表示はドルだが、円でもとめることができる）。10年間で約2倍だから妥当なところであろう。

### 物価あれこれ（メモ）

ハバロフスク市内で買物した人に、品物とその価格を書き出していただいた。ベリョースカなど外貨店での買物はのぞいてある。1992年3月末のハバロフスクの物価の一端ということになる。\*印は買ったものではなく、値札をメモしてきたもの。ちなみに、交換レートは1,000円=672ルーブルであった。

Pはルーブル、Kはコペイカをしめす。



○女兒用ワンピース	78P.
○女性用シームレスストッキング*	190P.
○婦人用ハンドバッグ	600P.
○女性夏服（ワンピース）	90P.
○銅製のコイン（キリスト使徒像、10cm×10cm）	21P.
○マトリョーシカ（中）	25P.
○鮭のくんせい（1尾、自由マーケットで）	200P.
○タラの卵の缶詰（1コ）	23P.
○鮭の缶詰	16P.
○アイスクリーム	1.5P.
○花の種（1包）	2P.
○絵はがきセット（1988年製）	54K.
○製図の本	55K.
○ノート（上質紙、方眼印刷）	90K.
○グリム童話集（すばらしい絵本）	175P.
○電卓*	1,700P.
○カメラ*	4,000P.
○ハバロフスクの地図帳	3P. 28K.
○コンピュータの本	20P. 10K.
○ハバロフスクの教育施設案内（リーフレット）	65K.
○クリスタルグラス（6コ、1セット）	300P.
○琥珀のイヤリング	70P. 80K.

社会主義経済にはなかった筈の失業者もかなりでているらしい。フトールシン氏はハバロフスクでも5,000人に達するのではないかと言っていた。失業者はとくに女性に多いという。これまでなら退職して年金生活に入る人たちがやめないのが、新しく職に就くのが困難だからだという。実際私たちは第126番幼稚園で、以前なら年金生活に入っている女性が働いている姿を見た。

インフレは低所得者・年金生活者を痛撃している。こうして、高額所得者はいないけれども失業者もいないという社会主義経済の最も優れた点の一つは急速に失われつつあるわけである。

## 21 ホテルの食糧事情など

私たちは1週間インツーストホテルに滞在した。10年前にくらべた変化は、エレベータが改良されたこと、日用品などを販売するユニハブという外貨店ができたこと、11階（最上階）に日本食料店ができたこと、などであろうか。ベッド、ロッカーをふくむ調度品はすべて木製であった。ロシアにもキーをフロントで管理する方式に変わったホテルがあるといわれるけれども、このホテルでは、従来どおり、各階のエレベータの前に常時座っているにジェジュールナヤと呼ばれる女性がキーを管理していた。

水は濁っていて、とても飲む気になれない。私たちは、下痢をするから飲まないこと、飲みたいときはポットをもって行って沸かすことという注意を出発前に旅行社から受けていた。ただし、各部屋には、火災の原因になるから電熱器は使用しないことという注意書きがあった。海外旅行者用のコンセントのついた小さいポットを持参し、これでコーヒーをいれたりもしたけれども、多くの人は日本から輸入した缶入りの水（たしか500mlの缶が350円だった）やウーロン茶をユニハブで求めて飲んでた。

ホテルの食事は、マスコミの影響でもっとも出発前に私が危惧した問題の一つであったけれども、予想外に快適だった。卵、バター、チーズもあった。ピフテキは出なかったけれども、肉も出た。野菜は、キュウリ、キャベツ、ニラのようなものだけ。1晩だけトマトがついた。野菜が少ないのは季節がらやむを得ないのであろう。食後には、希望に応じてお茶（紅茶）かコーヒーが出された。コーヒーの好きな私もう一杯所望すると気軽にに応じてくれた。しかし私たちが立ち寄った百貨店の片隅の喫茶店には、コーヒーはなかった。ホテルと街なかとは事情が違うらしく、外貨で支払う故か、ホテルの食事は全体として10年前よりはむしろ改善されたようにおもわれる。

食糧難は外国人専用ホテルには無関係かと思っていたら、最後の日の朝食の際、ウェイトレスは、砂糖が切れたのでコーヒーには砂糖はつきません、と告げてきた。

## 22 暖かい歓迎

私たちの学校訪問は、おおむねつぎのように行われた。

一行がバスで到着すると、大てい、校長らに迎えられる。大学をふくむどの学校も、わが国のように塀やフェンスで囲まれているわけではなく、立ち並ぶビルの一つというたたずまいだから、玄関の看板をみないと学校かどうかわからない（と外国人である私たちにはおもわれた）。

入るとすぐ校長室に招き入れられる。はじめに校長から歓迎のことばがのべられ、ついで口頭で学校の概要が説明される。その後、授業中の校内を参観する。予め参観コースが予定されていた如くであったけれども、希望すれば（そして時間の余裕があれば）、予定外のところも見せてくれたようである。実際には、私たちのスケジュールが過密で、予定外の教室をのぞく余裕はなかった。見学が終わると校長室に戻り、お茶の接待を受けながら質疑応答を重ねる。

私たちは、どの学校でも暖かく歓迎された。商業リツェイでは、塩をのせた大きなパンをもって、着飾った女生徒に出迎えられた。遠来のお客を歓迎する際の古くからの慣習だそうである。その玄関には「歓迎」(ドープロ・パジャールバチ)と大書した看板が掲げられていた。

どの学校も、授業中の教室を快く見せてくれた。聞きそこなったけれども、商業リツェイなどでは、どの教室も実習をしていたところを見ると、私たち参観者のために、授業時間を組み替えていたようにおもわれる。

授業参観と質疑が終わったあと、大ていの学校では団員におみやげを下さり、第12番中学校では「ラードスチ」(「喜び」の意)という民族舞踊サークルの舞踊を、第126番幼稚園でも可愛い園児たちの舞踏を見せてくれた。第3番中学校では、別れに際して、私たち日本人にも親しまれているカチューシャの合唱で送り出してくれた。友好会館で露日協会や教育行政当局者と会見した際も、終了後、アマチュア無線愛好会のサークル「ドゥルージバ」(「友好」の意)の出演によるくろうとはだしの独唱、民族舞踏があった。

この記録をまとめる段階になって、重要なことを尋ねなかったことに気づいた。私たちが第12番中学校を尋ねたのは3月28日(土)午後3時だった。校長の説明を聞いた後の授業参観では、かなりの教室に生徒たちがいた。一方では第3番中学校のように学校5日制をとる学校がある。それにもかかわらず土曜日の午後おそくに授業を参観させてもらうことができたことについては、①この学校は二部制なので土曜の午後にも授業がある、②本来は休日だが訪問団のために特に授業をした、などの可能性がある。いずれにせよ私たちはその理由を知らないままに帰国してしまった。

外国の訪問客とはいえ、13人の民間の視察団のための歓待としては大仰だという感がないではなかった。ソ連共産党が活動していた時代からの、上からの指令で組織される方式が続いているのではないか、という意見も一行のなかにはないではなかった。しかし、こうしたことは命令でできるものではなく、外国人が訪れることなどそう多くはない筈のハバロフスクの教師たちの、あるいはロシア人の生来の友好精神の発露だったのではないか、というところに大勢は落付いた。

## 23 ロシア人の親切——個人的な体験から

話題は変わるけれども、行事以外の面でも、私たちはロシア人の好意を感じる場面がいくつかあった。29日(日)に家庭訪問した際に忘れてきた高橋伊佐夫氏のノートは、翌日すぐに手元に戻った。これなどは、当然のこととはいえ、異郷でのことであり、戻ったノートを眺める高橋氏の嬉しそうな顔が忘れられない。

私にも、ちょっとした経験があった。

今回のハバロフスク視察に際し、私は、同市に在住している筈のニガイ氏に会いたいとおもっていた。ニガイ氏は、本職は外科医である。しかし、私の記憶では、氏の生いたちは小学校まで札幌で生活していた朝鮮人であり、敗戦直前に(恐らく親が労働力として徴集された関係で)サハリンに移住し、敗戦時から戦後にかけて辛酸をなめ、ソ連国籍を取得し医師となった人である。同時に

たんなる医師ではなく、日本語が達者なため、ソ連の学術代表团や労組の代表团の訪日の際に通訳として同行する機会の多かった人である。私と知り合った最初は1971年にソ連の労組代表团の通訳として来日した折で、その後も、来日の折に2回程会ったことがあった。

10年前の1982年に技教研の視察団がハバロフスクを訪れた際には、勤務後に幾晩かホテルを訪れて、私たちのさまざまな質問に答えてくれた。また休暇をとって私たちの学校訪問に同行してくれたり、日曜日には、ロシア語の不便な私たちのために買物に同行するなど、親切につき合って下さった。今回のハバロフスク訪問に際しては、しかし、事前に連絡をとることができなかった。

ところが、ハバロフスクに向かう新潟空港で、私は偶然に、前回ハバロフスクを訪れた折にソ連側の通訳をして下さった高氏に会った。同じ飛行機でハバロフスクに帰るところだったので、ニガイ氏に会いたいという私の希望を伝えることができた。しかし、ハバロフスクに着くと、私たちはすぐにイントウリストが差し向けたバスに乗ったため、ゆっくり話す間もなく別れてしまった。

ところが、31日夜部屋に帰ると、ジェジュールナヤから高氏夫人からの日本語で書かれたメモが渡された。調べたところ、ニガイ氏は数年前にハバロフスクを去り、転居先不明とのこと。ジェジュールナヤの話では高夫人は私たちの宿に来て下さったが不在だったのでメモを置いていかれた由。高夫人に電話したところ、ニガイ氏は数年前に交通事故にあつて外科医の仕事ができなくなり、他の都市へ転居したとのこと。もともと親戚のいない人なので元の勤務先や友人にも問い合わせたけれども、転居先を知ることはできなかったとのことであった。

ニガイ氏に会えないのは残念であったけれども、電話ですむことをわざわざ宿まで来て報せて下さろうとした高夫人の親切には恐縮した。経済事情の困難等で人心も殺伐となるかも知れない時期なのに、私には心地よい思い出になった。

## 24 印刷インクがない？

非能率だとも思ったのは、学校の概要が専ら口頭で説明されたことである。わが国であれば、小・中・高校なら『学校要覧』、大学なら『大学一覽』のような印刷物か、それに代わるないしそれを補足するプリントが配布され、それを手がかりに説明するところである。参観者全員に概要を記した印刷物が配布されたのは鉄道大学と教育大学だけであった（このほか工業テクニクムでは、事務局長の田中喜美氏に英文訳のついた学校案内が渡された）。鉄道大学の場合、印刷物は毎年つくられるのではなく、89年に創立50周年を迎えたことを記念して作られたもの（1991年発行）とのことであった。

印刷物やプリントがないため、獲得し得る情報量がひどく限定されてしまったことは否めない。校舎等の配置図がないので（これは概要の印刷物があつた教育大学、鉄道大学も同じ）、全体像がつかめない。わが国でいう当該学校の教育課程表が得られなかったことは、最も残念な点の一つだった。コピー機が普及していないことを知ってはいた。しかし、前回も今回も、印刷物がないことには、ややいらだたしさを感じたので、レセプションの際、第3番中学校長のリュボーフィ・ポリソー

ブナ先生（女性）に尋ねたところ、印刷機はあるのだがインクがないのだというウソのような答えが返ってきた。紙が不足しているという事情があるかも知れないし、もう少し突込んで尋ねたいところだったけれども、その余裕がなく、残念であった。

私は街の書店で低学年の子ども用のノートと日々の学習を記録する日記帳を買った。その紙質は、わが国の再生紙のような感じであった。この日記帳は88頁、元の値段は48カペイカと印刷されていたけれども、187カペイカとペンで訂正されていた。3.9倍になったわけである。

紙といえば、ロシア訪問3回目になる私は鈍感になっていきらがあるけれども、ロシア訪問が初めての人は、トイレットペーパーのごわごわの硬さには驚いたらしい。森林には比較的恵まれた国で、書籍や新聞の発行部数などからみて、紙の生産量が低いとはいえない。ロシアは工業国だという先入観念もある。決して高度のものを要するとはいえない製紙技術がかくも遅れているのは、何とも不思議なことである。

## 25 現代ロシアの教育をどうみるか

ロシアの技術教育、職業教育をどうみたらよいか。少し辛口で私の印象と疑問をそっちょくに記してみよう。

私のような年齢層の者は、総合技術教育（ポリテフニズム）を社会主義のすぐれた教育思想でありシステムであるとして学んできた。その総合技術教育ということばは、10年前に同じハバロフスクを訪問した時すでに聞かれなかった。今回もそうである。しかし、中学校の普通教育における労働科はいまなお重視されており、その授業にはポリテフニズムの精神がいまなお生きている、とみるのは楽観に過ぎるのだろうか。

社会主義の教育思想のなかで強調されてきた労働と教育を結合させるという思想は、普通教育の労働科と教育-生産コンビナート（ウーペーカー）という新しいシステムのなかで生かされている、と10年前に訪問したときの私たちの目には映った。それは、今回の訪問でも少なくとも今の段階では変わっていないように見えた。しかし、私たちの訪問したウーペーカーやペーテウーの校長が言っていたように、収益性が強調されるようなら、生徒の労働に収益を期待するのは現実的ではないという意味で、ウーペーカーの未来は明るくないといわなくてはならないだろう。

### 男女共学の問題

私たちが訪問した2つの中学校の高学年の労働科の授業や教育-生産コンビナートでは、裁縫、手芸関係の授業には女子、木工、金工関係の授業には男子というように、事実上性別に分かれていた。問いただした結果、生徒自身の選択の結果だと説明されたけれども、教師たちがこのような性別分化に疑問や問題を感じている様子はなかった。ここには、以前から指摘されているように、労働の世界で女子差別が解消され、職業の各方面への女性の進出が著しいにもかかわらず、家事は女子という性役割分業が強く残っていることの反映なのかも知れない。

性による専門の分化は中等職業技術学校（エス・ペーテュー）でも顕著で、今回私たちが訪問した第30番ペーテュー（造船関係）では女子は460名中3名に過ぎず、第7番ペーテュー（電気関係）でも生徒の殆ど全部が男子ということであった。これとは反対に、商業リツェイでは生徒700名のうち男子は20%に過ぎなかった。

労働科における男女のテーマ別分化の傾向や、工業系には男子が圧倒的に多く、商業系には女子が多いというペーテューの傾向は、どの位一般的な傾向なのかには判断できない。私たちが視察した学校に見る限りでは、日本の中学校や職業高校と似た事情にあるといえる（日本の高校については拙稿「高校における男女共学の現状と家庭科」『名古屋大学教育学部紀要——教育学科』第38巻、1992年3月、を参照）。従来からそうだったのか、最近になってこうなったのかわからないけれども、これは意外だった。

ソ連邦国民教育国家委員会が90年4月に発表した「ソ連邦およびソ連邦構成共和国の国民教育に関する立法の基礎」（略称「国民教育基本法」）の草案（『教員新聞』1990年4月第15号）は、85年の国民教育基本法にくらべると、「教授と共産主義訓育との統一」、「教授と訓練と実生活、共産主義建設の実践、社会的有用労働および生産労働との結合。総合技術教育、労働教育」、「男女共学」といった原則が削除されているという（前掲『海外教育ニュース第11集』1992年3月、263-264頁）\*。

\* 帰国後の福田誠治氏の教示によると、この国民教育基本法は、90年に1次案が、91年に修正案が公表され、私たちが帰国後の92年7月にロシア連邦の国民教育法として成立した。

鉄道テフニクムの学生のうち、女子は約10%とのことだった。工業テフニクムでは、数字は少し古いけれども、全日制課程の学生の半数は女子とのことだった。電気通信テフニクムでは、学生の性別内訳を聞きそこなった。鉄道大学の女子学生は約40%だから、鉄道テフニクムの女子が少ないのはやや不思議な気がする。しかし、いずれにせよ、テフニクムの女子学生の割合は、工業系のペーテューの女生徒の割合よりはずっと大きいらしい。

テフニクムや大学の学生中の女性の比率の高さは、各学校における女性教師の比率の高さに反映しているといえよう。実社会における女性差別が縮少し、女性自身の意識が変わってくれば、わが国もこうなるのかも知れないと私にはおもわれた。

それだけに、教師の賃金は男性にとっては安いので他の職業に転じてしまう、という工業テフニクムの校長のことは意外だった。このことはたんに教師の賃金の低さを表わしているに過ぎないのかどうかは、もっと研究してみないと何ともいえない。

中等職業技術学校（エス・ペーテュー）——以前の職業技術学校を中等学校に昇格させた学校——や中等専門学校（テフニクム）の専門教育では、わが国の工業高校や高等専門学校の現実からは想像もできないくらい細分化された教育をしている。『朝日新聞』は、職業技術学校をわが国の職業訓練校にあたると書いたことがある。新聞記者の眼にはそうみえたのであろう。職業技術教

育や中等専門教育のこのような細分化は最近になって始まったものではなく、10年前もそうだった。おそらくかなり以前からそうだったに違いない\*。文盲の国帝制ロシアが社会主義的な近代的工業国へ急展開するためには、細分化した職業教育が過渡的に必要だったというなら少しは理解できる。しかしそれが工業化をある程度達成した1950年代以後になお続いてきたということになると、中等レベル以上の職業技術教育や専門教育では、クループスカヤの時代から指摘されていたにもかかわらず、総合技術教育の思想は生かされて来なかったといえるのであろう。

\* 職種とそれに関連する賃金制度の歴史的変遷の概要については、福田、前掲書、207頁以下を参照。

職業技術教育や中等専門教育の細分化は、分化した職種あるいは専門（スペチアリノスチ）とその水準（格付け）が賃金算定基準と関連しているために強固に存在してきたといわれる。そうだとすると簡単には崩れないかも知れない。労働者の賃金をその熟練（クバリフィカーツィア）の格付にもとづいて定める慣行は、明らかに西ヨーロッパ文化圏のものである。私は前回も今回も、教育とくにその専門と賃金算定方式との関係を調査していないので明言はできないけれども、職業教育あるいは中等専門教育システムという点だけでいえば、西欧文化の古典的形態が現代に生きている感がある\*。しかし、学んだ専門と関係のない方面に就職する者も少なくないといわれ、激しいインフレの進行のなかで賃金体系も変わりつつあるとおもわれるので、現実には迫られて改善されていくのかも知れない。いずれにしても、ロシアにおける職業技術教育の専門分化学科の存在構造は、私たちにとってのソ連邦教育史研究の欠落部分の一つである。

\* 1980年にロシアの教育施設を視察した際のまとめのなかで、田中喜美氏も同様のことを指摘していた（田中「中等職業技術学校」『技術教育研究』第18号、1980年8月、29頁）。なお福田誠治氏は、「ソ連邦は、ヨーロッパの伝統を受け継ぎそれ以上ともいえる労働資格制度の社会を形作っている」とのべている（福田、前掲書、229頁）。

なお私は、ロシアの初等中等教育の学校体系については、①11年制学校、②9学年修了で入学する4年制の中等専門学校（テフニクムなど）、③9学年修了で入学する3年制の中等職業技術学校の3本建を基本とすること、大学は5年制が基本で医科大学だけが6年制である、というようないわば固定観念をもっていた（夜間課程、通信制課程は別として）。ところが、各学校の入学資格や修業年限は意外に多様であった。11年制学校の普及に伴って11学年卒業後の学校が発達してきたことは理解できる。しかし第7番エス・ペーテーウーのように4年制のエス・ペーテーウーがあったのは意外であった。この学校は電気の専門を教えているので、恐らくその専門の教育を充実させるために修業年限をのばしたものであろう。こうした学校体系の改編にみられるような柔軟性が、専門分化の細分化をも柔軟にしていくことになるのかどうかは、興味深いところである。

すでに80年と82年の2回にわたってソ連の技術教育、職業教育を視察してきた私たちは、リアルに現実を見ていたから、いたずらな幻想をいだくことはなかった。その意味で今回の訪問でも驚きはなかった。財政上の困難や職業技術学校には勉強嫌いの子どもがいて困るなど、校長さんたちが

悩みをそっ直に語ってくれたことが、前回の訪問との違いの一つだった。

ソ連邦の解体、官僚的で覇権主義に陥っていたソ連共産党が崩壊したあと、エリツィンの指導するロシアがいかなる方向に歩もうとするのか、まだはっきり見えない。教育についてもそうだ。いまの段階では、エリツィン大統領は、近代的あるいは資本主義的な意味での合理主義を欠いたまま、資本主義に幻想をいだきながら、経済の自由化の名のもとに空想的資本主義を追いもとめているように私には見える。資本主義世界には見られないソ連の教育の強みであった筈の教育の無償制原則を撤廃したり、中等専門教育や高等教育の通信制課程や夜間課程を縮小しようとする動きもそうである。費用のかかる職業技術学校や中等専門学校を縮小しようとしているのもそうである。私たちの見た限り、いまでさえお金をかけているとはおもえないのに、いまより教育予算を削って、どのように国家の未来を描こうとしているのか、解しがたいところがある。

近代的あるいは資本主義的合理主義の欠落は、1週間滞在したに過ぎない私たちにも、いろいろなところにかいまみられた。新しい学校として紹介された商業リツェイでもそうだった。キャッシュレジスタを学校で教えるなどということは、私たちには想像もできない。生徒へのサービスの一環としてならとにかく、喫茶店（バー？）を教育施設として学校内につくるなどという発想もそうである。商業を教えるということならば、合理主義を土台とした複式簿記をしっかりと学ばせることが基本なのではないか、と私にはおもわれた。革命後の青年たちに簿記を学べと繰返して強調していたレーニンのことばを、たらいの水とともに流してしまう愚が行われようとしている、といっている言い過ぎだろうか。換言すれば、その肖像ではなく、レーニンの教えを残して発展させることが必要なのではないだろうか。いまなおペーパーテストを嫌い、商業リツェイで一例が見られた如く試験では面接を基本とするといううらやましいくらいしっかりした教育方法の思想をもつ国で、安易な（としか見えない）改革が行われようとしている理由が、私には理解できなかった。

テフニクムの実験室や各教科ごとの教室の展示物、動態模型にくふうがこらされ、充実していることは、驚きだったといつてよい。こうした優れた教育方法の理念をもつ国の経済が脆弱化したりするのだから、政治はむずかしい。ロシアの教育にもいろいろな弱点はあるのであろうけれども、こうした優れた点は今後とも発展させて欲しいものである。

日本語教育を導入した第3番中学校をはじめいくつかの学校の校長や教師が、日本との交流（ないし日本の援助）を望んでいることを表明していた。私たちはいわば私人として訪問したに過ぎず、視察だけを目的としていたので、こうした要望に応える準備がなかった。しかし今後は、民間レベルをふくめて、交流・援助が有益であろうと痛感したことを書きそえておきたい。

さいごに、国家組織の変革、経済事情の困難化という悪条件が重なるなかで、資本主義国の教師の私的な一団に過ぎない私たち視察団を快く受け入れ、多くの教育施設視察をアレンジして下さり、可能な限り歓待してくれた露日協会ハバロフスク支部の人びと、参観の場を設定して下さった12の教育施設の教職員の方々、心から歓待してくれた子どもたちに心から感謝したい。私たちの視察は、驚く程に友好的な雰囲気のもとに行われた。私の知る限り、ロシア側の責任に属する齟齬(そご)は



全くなかった。困難な条件のもとでも善意と友好精神を決して失わないところにロシア人の偉大さが表われている、といってよいのであろう。

この報告をまとめるについては、めんどろな仕事に心づかいをして下さった田中喜美事務局長をはじめとする同行の方がたの談話や感想、提供して下さいった手記や写真などを参考にさせていた。とくに、差ヶ久保悟氏や衣川洋一氏の手記や、井上平治氏の手紙、杉本信忠氏と高橋伊佐夫氏のビデオ、1日を第3番中学校で過ごされた村田豊美氏のメモは有益であった。また本報告の原稿に目を通して下さった夏目達也、関啓子、福田誠治の3氏から有益な情報を得た。記して謝意を表す。もちろん、この文章のすべての責任が私にあることはいうまでもない。

(1992年12月記)

#### 〔追記〕

校正の段階で、現代ロシアの教育に関する興味深い岩崎正吾氏の一文に接した。氏によると、ロシアの教育におけるペレストロイカは、ゴルバチョフが書記長になって始めた社会・経済体制のペレストロイカよりも1～2年遅れて始まったという。そしてこの教育のペレストロイカは、ある時期から脱ペレストロイカともいうべき路線に転換した、と同氏はみている。その転換の時期は、91年8月のいわゆる「政変」や同年12月のソ連邦解体よりも早く、「90年後末から91年にかけて」ではないかと考えられるという。氏は、この転換の指標として、91年2月に出された「ロシア共和国公立普通教育施設暫定規定」をあげている。それ以前にはまだ「社会主義の理念」が残っていたけれども、この規程には教育理念や方針の点で従前のもとは際だった相違がみられるという。そしてこの転換は、92年7月の「ロシア連邦教育法」によって一応確定されたという(岩崎正吾「転換期におけるロシアの教育——教育改革の現実、モスクワの学校を訪問して」『ソビエト研究所ビューレティン』第24号、1992年12月、2～9頁)。氏の論法でいくと、私たちは転換の真最中に教育施設を視察してきたことになる。

〔なお、本報告は、1991～93年度科学研究費総合研究(A)「学校の技術・職業教育と学校外の職業教育・訓練の関係についての国際比較研究」(研究代表者・筆者)の研究成果の一部である。〕